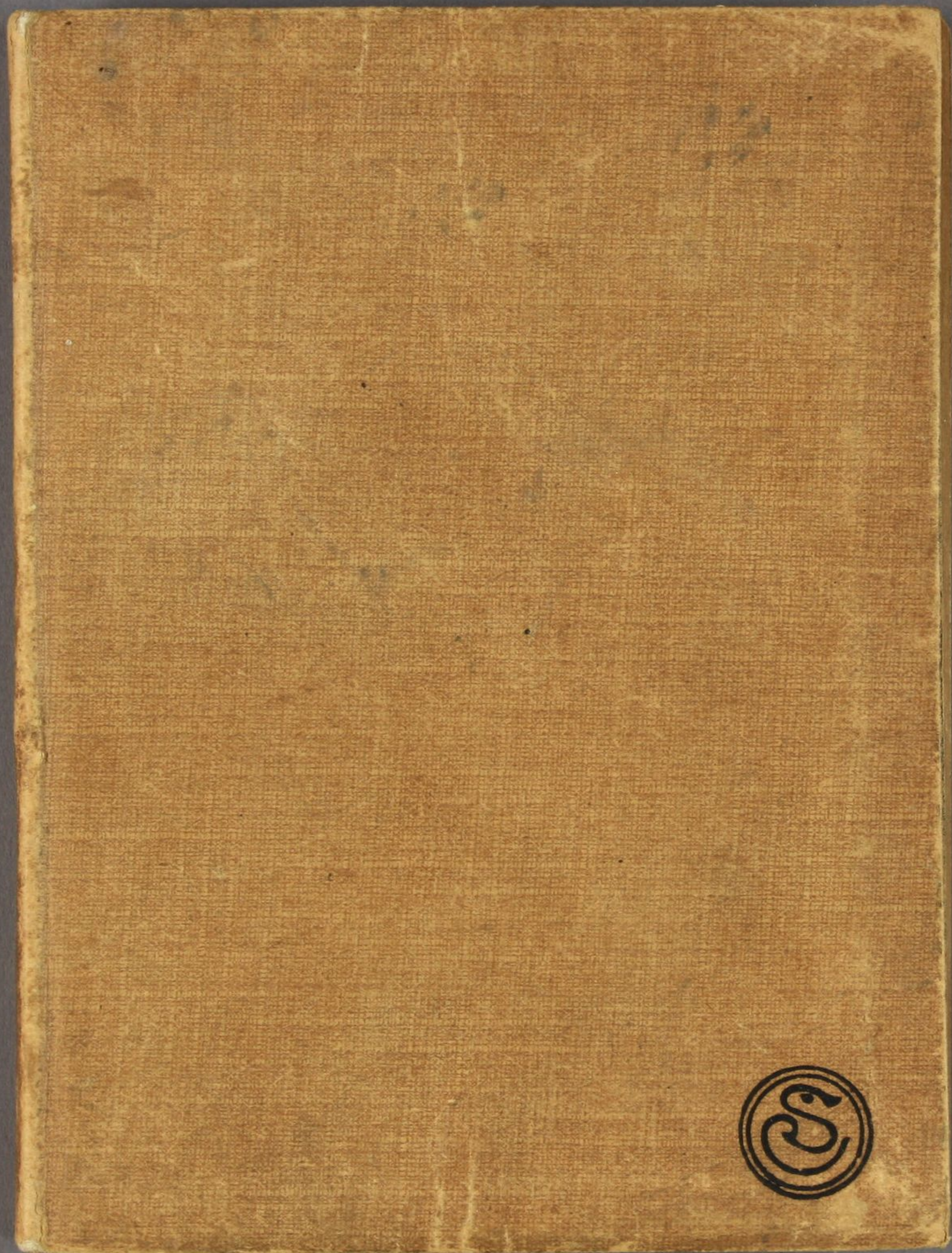


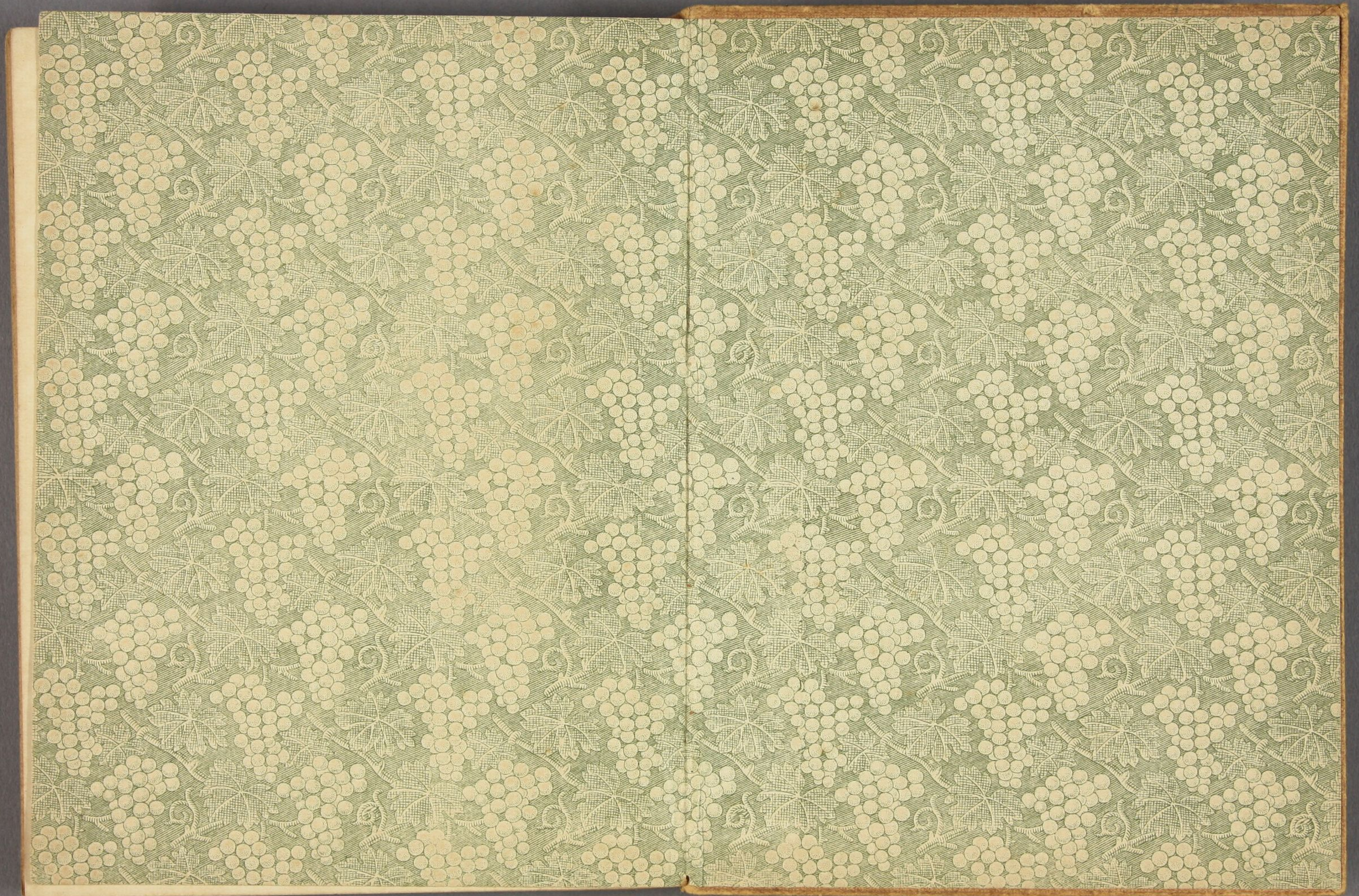
POEMS IN PROSE

IVAN TURGENEV



ツルゲーネフ散文詩





フネーゲルツ

詩 文 散

譯 二 柴 野 草

自分の文學上に新開眼を與へてくれた多くの巨大なる文星の中、ツルゲーネフは最も力強きものであつた。殊に其の散文詩は、強烈なる力を以て自分に臨んだ。今此處に全部これを譯出するに當つて、自分の筆の拙なさを恥づると共に、更にツルゲーネフが自分に與へたことの偉大であつたのに思ひあたり、感想殊に深きものがある。此の譯文が唯自分の懐しい紀念の爲めにのみならざらんことを祈るものである。

譯者識

目次

(一)

——一千八百七十一年——

田舎……………二

會話……………九

老婆……………一四

犬……………二〇

わが敵……………二二

乞食……………二六

満足せる人……………二八

「爾は愚人の判断を聞かればならぬ」……………三〇

處世訓……………三四

世の終り……………三六

マーシヤ……………四二

愚人……………四七

東方古譚……………五二

詩の二節……………五九

雀……………六九

頭骸骨……………七二

労働者と白い手の人……………七五

薔 薇……………七九
 最後の面會……………八四
 ウレウスキーを追懷して……………八八
 訪 問……………九二
 必然、力、自由……………九六
 布 施……………九八
 蟲……………一〇三
 キヤベツの肉汁……………一〇七
 空明の國……………一一一
 二富豪……………一二五

老 人……………一二七
 探訪員……………一二九
 二人兄弟……………一三一
 主我主義者……………一二六
 神の饗筵……………一三一
 スフィンクス……………一三三
 ニンフの女神……………一三六
 友と敵……………一四二
 基 督……………一四六

(II)

一千八百七十九年—
—一千八百八十二年—

石 一四九

二羽の鳩 一五一

明日！明日 一五六

自 然 一五八

絞殺しろ 一六二

何を思ふだらう 一六九

其薔薇よいかに美しく清かりしよ 一七二

海上にて 一七七

N N 一八二

生まれ 一八四

僧 一八七

我等は尙ほ戦はう 一八九

祈 禱 一九二

露西亞語 一九五

散文詩

ツルゲーネフ作
草野柴二譯

千八百七十八年

田舎

六月の終りの日。此のあたり一千ヴオルストはわが郷國、露西亞である。

一體の青い色が空一ぱいに漲つて、一片の雲が半ば漂ひ半ば消えて行く。風のない、暖かな………新しいミルクのやうな空気が。雲雀は急がし相に囀り、野鳩はクウ〜と鳴く、音も立てず

詩文散

田舎

燕があちこち飛び廻つてゐる。馬は嘶いて齒を咬み合はせ、犬は吠えもせず尾を掉つて、平和しく立つて居る。

烟の香、乾草の香、其れにタールの臭ひも少しする、獸皮の臭ひも少し雜つて居る。麻は今満開で、重苦しい、心地の佳い芳香を放つ。

峡谷は深いが斜めになつて、其兩側には楊樹が列をなして居る。上の方は擴がつて、幹の下の方には裂罅がある。峡谷には小川が流れて、底の小石が清らかな逆流の中に躍つて居る。遠く天と地との境目には薄緑の大河が横つて居る。

峡谷に添うて一方には戸を閉め切つた、小じんまりした小舎だ

の、小さな物置小屋だのが並んで居て、他方には板葺屋根の松小舎が五六軒ある。屋根の上にはそれと鳩の巢の高い柱があつて、その入口には各々小さな、蠶の短かい、鐵製の馬が置いてある。粗雑な窓硝子には虹のあらゆる色が反射して居る。窓の戸には花瓶の圖が書いてある。家の戸の前には皆小さな椅子が一つづつ几帳面に据ゑ付けてある。高く盛つた土の上には猫が日光浴をやつて居る。その透きとほるやうな耳が、物に驚いては聳つ。高い敷居の向ふには冷い、暗い表部屋が見える。

私は峽谷の眞際に馬衣を展べて横つた。あたり一面に刈つてからまだ間もない乾草が積まれて、壓へつけるやうな芳香を放つ

てゐる。敏捷い農夫等がその乾草を小屋の前あたりへ投る。今少し日光に乾かして、納屋へ入れるのだ。その中に安らかに眠る事であらう。

捲き髪の子供らしい頭が積草の間から突き出る。鶏冠のある鶏が乾草の中に蠅や甲蟲を探して居る。そして唇の白い仔狗が亂れた草の中を轉がり歩く。

美しい頭髪を長くのばした若ものらがさつぱりした外衣に低い帯をして、大きな靴を穿き、まだ馬具の着けてない荷車に凭れて白い歯を出して頻りに滑稽、皮肉を云ひ合つて居る。

丸顔の若い女が窓から覗いて、若もの等の言葉を聞いたり、ま

た草の上を轉げ廻る子供等を見て笑つて居る。

今一人の若い女は逞ましい腕で、井戸から濡れた大釣瓶を引き上げる。釣瓶は震へ、振れて、洩れる滴りが長く輝いて居る。

私の前に年取つた女が立つた。新しい縞の下袴を着け、新しい靴を穿いて居る。

淺黒い瘦せた首には、ふつくらとした、うつろ玉の珠數を三列に巻いて、白髪のを黄地に赤模様の頭巾で縛つて居る。頭巾が垂れ下つて力の無い目に蓋して居る。

れけ共老眼には歡迎の笑があり、皺のよつた顔一面にも微笑を湛へて居る。此の老婦、七十にはなつて居るのだらう……が今

にしてもその全盛には美人であつた事が知られる。

日に焼けた指を屈めて、右の手には穴倉から出して間も無いクリームを容れた冷乳の椀を持つて居る。椀の周圍には雫が滴れて、眞珠の糸のやうだ。左の掌には温い麵包の大塊を乗せて、丁度「道行く人よ、來りて之れを召し給へ。」とでも云ふやうに、私に持つて來た。

突然鶏が鳴いて、騒しく羽叩きすると、牛部屋に閉ぢ込められてゐる犢が、ゆるやかにそれに答へる。

「あゝ、大變な燕麥！」と私の馭者が云ふ。……あゝ、満足な、靜平な、豊富な、廣い露西亞の田舎！。あゝ、深い平和と豊

かな暮くらし！

私は思つた。「コンスタンチノーブルの聖ソフィヤ寺院の圓閣の上の十字のしるしや、その外、われら都人が思ひ煩つて居る凡ての事も茲ではわれらに何の價值があらうぞ。」

(一千八百七十一年、二月)

會話

「ユングフラウもフ井ンステラアルホルンも

未だ嘗て人間の足に踏まれたる事なし」

アルプス山の絶巔……我々たる斷崖の連なり……山々の唯中。

山の上の空は淡緑に澄み渡つて音もない。辛々しい烈霜、きら／＼と光る固い雪、氷に覆はれ、風に吹き荒ばれた山の頂上、雪の中から怒つたやうに突出て居る。

大山二つ、地平線の方に二巨人のやうに立つてゐる。ユングフラウとフキンステラアルホルンである。

ユングフラウが隣の峯に問ふ。

「何か耳新しい事を話してくれないか。何か見たらう。下界にはどんなものがあるんだ。」

二千年経つた。併し彼等には一分の思である。その時フィンステラルホルンの返事が轟き渡る。

「地の上には厚い雲が覆うて……暫らく待つて見給へ。」
更に數千年過ぎ去つた。併し唯一分の思。

「フン、而て」とユングフラウが問ふ。

「見えた。下は皆同じだ。青い水、黒い森、灰色の石だ。み、其間に虫が相變らず彼方此方に走せ廻つて居る。それは君も知つて

ゐる二足の奴で、まだ僕にも君にも這ひ上つた事はないのだ。」

「人間の事か」

「さうだ、人間だ」

一思に二千年飛ぶ。

「今は何うだ。」と、ユングフラウが問ふ。

「虫の數も少なくなつて、下の方は少し明るくなつた。水は減つて森も疎らだ。」とフィンステラルホルンの聲が轟く。

また一思ひに數千年飛んだ。

「何か見えるか」ユングフラウが云ふ。

「吾々の近くは少し清らになつたやうだ。併し遠方の谷間には

まだ斑點があつて何物か動いて居る。」とフキンステラアルホルンが答へる。

「而て今は。」と一思ひにまた數千年経つた後、ユングフラウが尋ねる。

「今こそ佳い。到る所清らかだ、眞白だ。見給へ何處でも、到る所われらの雪だ。果てしもない雪だ、氷だ。今こそ佳い、今こそ静だ。」と、フインステラアルホルンが答へる。

「そりや好い。併し吾等は随分饒舌つた、もう眠るべき時だ。」とユングフラウが云ふ。

「さうだ、眠るべき時だ。」

大山は眠つた。緑の、澄み渡つた空も永劫、沈黙の境に眠つた。

(千八百七十八年、二月)

すると又後の方でひたひたと、軽い、云はゞ忍び足の音がする。
 「矢張前の女だな。なや私を追跡て来るのだらう。」と思つたが、
 その時また「多分眼も見えないで道を失つたのだらう、それで私
 の発音をたよりに人家のある所へ出ようとして居るのだらう。左
 様だ、左様に違ひない。」と思ひ直した。
 併し、云ひ知らぬ不安の念が、漸々心の中に擴がる。「此の姥は
 私について来るばかりでなく、私を導いて居るのだ。私を右へや
 り、左へやりして居るのだ、そして私は、不知不識それに服従し
 て居るのか。」と、思ひ初めた。
 けれ共私は尙進んだ……が、あゝ、私の前に、私の行く道の

上に、黒い、廣い何物かがある。……「墳墓！」と私の心の内に
 閃いた。「姥は其處に私を追うて行くのだ。」
 急に私は後を向いた。姥は再び私と對合つた……が今度は
 見て居るのだ。大きな、残忍な、毒々しい目……摯鳥の眼で私
 を見て居るのだ……私は姥の顔の所へ身を屈めて其眼を見ると
 ……また例の不透明な膜が張つて、矢張盲目の、鈍い顔……
 「あゝ、此の姥は私の運命だ、何人も免れる事の出来ない運命な
 のだ。」と私は思つた。
 「免れる事は出来ない！免れる事は出来ない！ナニ、馬鹿な……
 やつて見なければ分るものか」と、私は他の方向へ走つた。

私は疾走した……けれど、軽い足音は依然として私の後へ追
 る……そして行手には矢張、暗い穴が。
 また私は他の方へ振向いた……すると後方には矢張同じ足音
 前には同じ怖ろしい、暗い場處。
 獵犬に追はれた兎のやうに、急に方向を變へ乍ら、色々の道を
 走つたが……何うしても同じ事だ。
 私は考へた「待てよ、一つ姥を誑してやらう、何處へも動くま
 い。」と、私は直に地上に坐つた。
 姥は私と二歩ばかり離れて立止つた。私は音を聞いたのではな
 かつたが、その邊に居ると感じたのだ。

忽ち私は、遠方にある例の暗い穴が、自ら動いて私の方へ近い
 て來るのを見た。
 あゝ、私は再び振向いて見た……姥は真直に私を見て居るの
 だ。齒の脱けた口は冷笑を含んで歪んで居る。
 所詮駄目だ。千八百七十八年、二月

犬

室の中には、犬と私と二人……戸外には恐ろしい暴風が狂つて居る。

犬は私の前に坐つて、私の顔を真向に眺めて居る。

そして私もまた、彼の顔を見入つて居る。

彼は私に何事か話さうとして居るらしい。

彼は啞だ、彼には言葉がない、彼は自分自らをも知らない……

併し私は彼を識つて居る。

私は今、われ等の間に何等の差異もないと云ふ感じが、彼の中

犬

にも私の中にもあると云ふ事を識つてゐる。吾等は同じ物だ、何方にも同じ火花が燃え輝いて居る。

冷たい、長い死の翼が、揺れて来てそれ等を掃き去る……

そして萬事休するのだ。

その時われ等の内に輝いて居た火花が何であつたか、誰れが知

らう。

否、互に見合つて居るわれ等は畜生と人間とではない。

互ひに結び合つてゐるその眼は、平等のものゝ目である。

畜生と人間と、その各々の眼には同じ生命が、恐れ戦いて、互

に絡まり合つて居る。(千八百七十八年、二月)

わが敵

私に一人の同僚があつて、それがわが敵であつた。事業の敵でもなく、仕官の敵でもなく、また戀の敵でもない、唯二人の見解が、如何なる問題に於ても決して一致しない、だから二人が寄れば必ず果てしもない論議が起るのであつた。

二人は何事にも論争つた。藝術につき、宗教につき、科學につき、現世につき、未來世につき。殊に未來世の事に就いては論争つたものであつた。

彼は信仰篤き、熱心な人であつた。或日彼は斯ういふ事を云つ

た「君は萬事を冷笑する人間だが、若し僕が君より前に死ねば、必ず他界から君の處へ顯はれて見せる……その時果して君が嗤ふか、どうかを見よう。」と。

實際彼はまだ若くして私より前に死んだ。併し年は移つて、私は彼の契約、彼の脅嚇を忘れて了つた。

一夜私は床に入つて眠れなかつた、實は、眠らうと欲しなかつたのだ。

室の中は暗くもなく、また明るくもなかつた。私は灰色の薄明りの中を見詰めて居た。

忽ち二つの窓の間に、わが敵の立つて居るのを見た、彼は頭を

上下に、ゆるく、悲しげにうなづかせて居る。

私は恐れなかつた、驚きもしなかつた……！唯少し起直つて、肘をついて、猶一層熱心に思ひがけない幻影を見た。

幻影は相變らず點頭いて居る。

私は竟に口を開いた。「君は勝ち誇つて居るのか、それとも悔い恨んで居るのか。これは何う云ふ事なのか——警めるのか、責めるのか……或はまた、君が間違つて居た事を知らせに來たのか、または吾々二人共間違つて居たのか。君が今受けて居るのは地獄の苛責か、天國の悦樂か。君せめて一言でも云ひ給へ。」
けれ共わが敵は矢張唯悲し相に、伏目勝ちに、頭を上下に動か

して居るばかりで、更に一言も發しない。

私は笑つた……彼は消えた。(千八百七十八年、二月)

乞食

町を歩いて居た……老衰した乞食が袖を引く。
 赤く爛れて、涙ぐんだ眼、蒼い唇、穢らしい襤褸、膿みたられ
 た傷、……あゝ、貧乏と云ふものが、此の薄倖な身を咬んで、
 かく迄醜いものにして了つたのだ。
 赤く腫れあがつた、穢ない手を差し出して彼は唸つた、救けて
 くれとも判然は云へない。
 私は私の衣兜を残らず探つて見た……財布もない、時計もな
 い、ハンカチーフすら持つて居なかつた。……私は何にも持つ

て居なかつたのだ。乞食はまだ待つて居る……差し出した手が
 力無く、プル／＼と顫へて居た。
 私は殆んど當惑して、その顫へた穢ない手をシカと握つた……
 「怒つて呉れるな兄弟よ、私は何も持つて居ないのだ」
 乞食は赤く爛れた目でじつと私を見た。血の氣のない唇には
 微笑を含んで、彼も亦、私の冷たい指を握つた。「何う致しまして
 兄弟よ。是れがまた忝けない。是れも亦施物です。」と彼は口籠る。
 私も亦此の兄弟から賚を受けたやうな氣がしたのであつた。

(千八百七十八年、二月)

満足せる人

首府の途を一人の青年が雀躍りしながら行く。その舉動が楽しさうで、快活で、目には光を帯び、唇に笑を湛へ、輝いた顔には樂げな血が循つて居る……彼はこの上もない満足と悦樂を得て居るのだ。

彼れの身に何事が起つたのだらう。遺産を受けに来たのか、榮進したのか、戀しい人に會ひに行くのか、或は唯うまい朝飯を濟まして、健康の感じと、頃加減の満腹の感じが彼の全身に漲つて居るのか。確かに波蘭王スタニスラスがこの青年の頸に、美しい

八稜の十字をかけたのでもあるまい。

否、彼は朋友の醜聞を造つて、盛にそれを蒔き歩いた、そして他の朋の口から同じ誹謗を聞いて、自分も亦それを信ずるに至つたのだ。

あゝ、何等の満足！。此の時此の溫和な、有望な青年は、實にかかばかり親切であつたらう。(千八百七十八年、二月)

「爾は愚人の判断を
聞かねばならぬ」

——プーシキン

「爾は愚人の判断を聞かねばならぬ……」おゝ、われ等の大詩人よ、君は常に眞實を語る。此の度もまた、實を告げた。「愚人の判断、群衆の嗤」……誰れか是を知らぬものがあらうか。

凡てそれ等のものは、忍ぶ事の出来るもの、また忍ばねばならぬものである。而して力ある人は其れを意に介しない。

けれど世には一層残酷に人の中心を刺す打撃がある、……或

る人は出来る限りの事をした、精力を盡し、愛情を以て、正直に働いた。而も正直な人々の心は、憎悪を以て顔を背け、正直な人々の顔は、彼の名を聞いてすら憤怒に燃えた。「去れ！退け！」と正直な青年は聲々に叫んだ。「われ等に」汝の必要はない、われ等は汝の世話を要しない。汝はわが住居を穢すものである。汝はわれ等を識らない、われ等を了解しない、……汝はわれ等が敵である。」と。

かゝる場合、その人は何うすれば善いのだらう。自らを義しきものとしようともせず、また更に公平なる判断を求めようとするもせず、唯飽く迄働くのである。

その昔、百姓共はパンに代つて、貧民が日々の食物たるべき馬鈴薯を持つて来た旅人を呪つた。……彼等は旅人の差し出した手からその貴き賜物を泥土の中に振り落とし、それを踏みじつた。今彼等はそれに養はれて居る、而も其恩人の名さへも知らぬ。さはれ、恩人の名は彼等には何であらう。彼はよし名は知られずとも民衆の飢饉を救つた。

われ等は唯われ等の齎らす所のものが、眞に善良な食物であるやうにしよう。

爾が愛する群生の唇から出る苦い、不当な批難……然しながらそれは未だ、堪へ得べきものである……

「我を打て、されどわが言に聽け。」と、アテンの主領はスパルタ人に云つた。

「われを打て、されど健康にあれ、満腹してあれ。」と、われらは正に云ふべきである。(千八百七十八年、二月)

處世則

狡猾な一老奸が私に語つた。「若し敵を非常に懊惱させようと思ひ、また彼を害しようと思つたならば、自分の缺點であり、悪徳であると思ふ所を以て敵を責め給へ。憤激して……大に誹り給へ。」

さうすれば、先づ第一に、他の人に君がそんな不徳を持つて居ないと考へしめるだらう。

第二には君の憤激は眞面目なものになる事が出来る……君自身の良心の呵責を他のものに移す事が出来る。

處世則

例せば、若し君が數々裏切りをする人であつたならば、君の敵を自信の無い奴と罵り給へ。

若し君が心から卑屈な人であつたならば、敵を卑屈者と云つて厳しく責め給へ……文明の奴隷である、歐洲の奴隷である、社會主義の奴隷であるといつて。

「非奴隷主義の奴隷と云ふ事も云へるだらう」と私が云ふと「それも善からう」とその狡猾は點頭いた。

(千八百七十八年、二月)

世の終り

(夢)

私は、魯西亞の或る荒野の、素樸な田舎家に居たと思つた。大きな、低い屋根の室で、窓が三つあつて、壁は白く塗つてあつた。家具は何もない。家の前は荒れた平原で、下の方は漸々斜めになつて、ずつと向ふ迄擴がつて居た。灰色の、變化のない空が、ベッドの天蓋のやうに平原を覆うて居た。

私は一人でなかつた。室の中には私と一緒に、凡そ十人ばかりも居た。質素な衣服を著た平凡な人ばかり。彼等は黙つて、

忍びやかに、彼方此方と歩んで居る。彼等は互に避けあつては、居たが、矢張不安心な目付で眺めあつて居る。

なせ此の室に來たのか、また自分と一緒に居る人々は何んなものであるか、誰れも知らない。皆の顔には不安と絶望の色が浮んで……皆な交るゝ窓に近づいて、何か外から來るものを待つて居るやうに、熱心に見廻して居た。

而してまた、彼方此方と彷徨ひ初める。私等の中に一人、形の小さな子供が居て、始終「父よ、私は恐い」と一様の細い聲で啜り泣きして居る。その啜泣きを聞くと胸が痛くなつて、自分もまた恐れ初める……何を恐れるのか自分にも解らない。唯或る大

きな困難が次第に近よりつゝあるやうに私は感ずるのであつた。
 子供は愈々泣き續ける。實に息苦しい！實に氣懈い！實に重々
 しい！……けれ共遁れる事は到底出來ないのだ。

空は壽衣のやうだ。それに風もない……空氣は死んだので
 なくて何であらう。俄然、子供は窓の所へ走つた。そして例の悲
 しい聲で叫んだ。「御覽なさい、御覽なさい。世界が壊れた」。

「何うして？世界が壊れた？」さうだ。唯今迄家の前に平原があ
 つたが、今は恐ろしい高い所に立つて居る。地平線が沈んで、下
 に行つて、そしてその家から丁度中を剋り出したやうに、殆んど
 覗きかゝつたやうな、黒い斷崖が垂れ下つて居る。

私共は皆窓の所へ集まつた……恐怖が吾々の心を凍らす。

「彼處に……彼處に！」と私の次に居る人が囁いた。

見ると、遠く陸地の全境界線に添うて、何物か動き初めた、小
 さな、殆んど圓い丘のやうなものが、高まつたり低くなつたりし
 てゐるのだ。

「海だ！」われ等は皆同時に思つた。「それは吾等を凡て呑んで了
 ふのだらう……唯何うして上の方へ昇つて來る事が出來るだら
 う。こんな斷崖の上には？」

けれ共昇つて來る、猛烈に昇つて來る……最早遠い處に高ま
 つて居る、かけ離れた丘ではない……唯一つの、打ち續いた、

恐ろしい波が地平の全線を抱いた。

其はわれ等を目懸けて、押寄せて來るのだ。それは氷の如き大風の中に飛狂ひ、陰府の闇の中に渦巻いて居る。あらゆるものは戦慄した——而して此の飛び狂ふ大形の中に——噛み割るやうな雷のはためき、幾千の喉から出る、凄い號泣の聲が聞える。

あゝ、何等の咆哮！何等の號泣！是れ世界が恐れに呻いて居るのだ……

世の終り！萬事の終り！

已前の兒は今一度泣いた……私にはわが伴侶を捉へやうとしたが、既にその時われら凡ては、其漆黒の、氷のやうな、雷礮

めく波に碎かれ、埋められ、溺らせられ而して掃き去られたのであつた。

暗黒……永遠の暗黒！

息が出來なくなつて、私は目覺めた。

マーシヤ

幾年か前の事、私がペテルスブルグに住んで居た時分には、櫛を雇ふ機會のある度にいつも御者と會話を試みたものであつた。私は殊に夜の御者と語るのを好んだ。それ等は地方の貧乏な百姓であつて、自身の生活費や彼等の主人に拂ふ地代を儲ける目的で、赭石で彩つた櫛と、瘦せた馬とを持って首府に來た者共である。

或る日私は、此種の櫛御者を雇つた。……彼は二十位の若者で。丈は高く、逞ましい體格で、碧眼紅頬の立派な男だつた。目

の處迄深く冠つた、ぼろくの、小さな、補綴つた帽子の下から、小さな渦に捲れた美しい髪が見えて居る。斯んな小さな、引さけた外衣がよくも斯んな巨きな肩に着られたものだ。けれ共櫛御者の美しい、鬚のない顔は悲相に伏し目になつて居た。

私は彼と話し初めた。彼の聲にも亦悲しげな調がある。

私は彼に問うた。何うしたの？何うして面白くないの？何か

困つた事でもあるのかい」

若者は暫時答へなかつたが、竟に云つた。

「はい、ありますよ。こんな情けない事は又とありません。家内

が死んだのです。」

「お前その女を可愛がつて居たの……その細君を。」

若者は私の方には見向かないで、唯頭を少し下げた。

「可愛かつたですよ。それから八月になります……がまだ忘れません。此の悲みに身を咬はれて居るのです……全く。なぜ家内は死なよきやならなかつたのでせう。若かつたのに、丈夫であつたのに……コレラでやられて了ひました。」

「して、好い細君だつたかい。」

「ハイ」と可憐な男は重い太息を吐いて「二人で居た時は實に愉快でした、それに私を残して死んで了つたのです。もう葬つて了

つたと、始めて此處で聞いたので、すぐ私は村へ駆け付けました。家へ著いたのは夜半過ぎでした。小屋へ這入つて私は、室の真中で静かに立つて居ましたね。そして、そつと「マーシヤよマーシヤ」と小さな聲で呼んで見ましたが、唯蟋蟀が鳴いて居るばかりなので、私は聲をあげて泣きましたよ。それから小屋の床に坐つて、拳固で以て地を打つたですよ。「この胴慾な土奴！……貴様は家内を呑んで了つた……私も呑むのだ……あゝ、マーシヤよ」つてね。」

彼は沈んだ聲で、突然「マーシヤ」と附加へた、手綱を持つたなりで、彼は自分の袖で涙を拭ひ、肩を縮めて最早何も云はな

つた。

櫓を降りた時に、私は賃錢の外に、僅かばかりの金を興へた。
彼は、丁寧に禮をして、一月の霜の、灰色の霧の中を、荒れた町
に一樣に降り積つた雪の上を、ゆるやかに引き去つた。

(千八百七十八年、四月)

愚 人

一人の愚人が居た、

永い間彼は平和に、満足に暮して居た。併しその内、彼は諸方
からつまらぬ愚人であると思はれて居るとの、評判を聞き初めた。
彼は恥かしくなつて、何うしたならば此の不愉快な風評を、揉
み消す事が出来ようかと、打沈んで考へ初めた。
竟に彼れの鈍い、小さな頭腦に、或る考へがフイと浮んだ……
そして、少しも猶豫しないで、それを實行した。

或る朋友が彼れに途中で會つて、ある有名な畫家を褒めた……

「確かに君、その書家は、ずつと前に時代遅れになつて居るのだ。……君知らなかつたのかい。君をそんなとは思はなかつた……君は全く時世に遅れてゐるネ。」と、その愚者が云つた。
 朋友は驚いて、直にその愚者に同意した。
 「僕の昨日讀んだ書物は大層佳いものだつたよ。」と他の朋友が彼に云つた。

「君耻かしくないのかい。誓つて云ふがその書物は一向つまらないものだ。誰れでもずつと昔に讀んで了つてるよ。君それを知らなかつたのかい。君は全く時世遅れた。」と愚人が云つた。
 此の朋友も亦驚いて、愚人に同意した。

「僕の朋友の NN は實に驚いたものだ。あれこそ、實際寛大な人間だ。」と、第三の朋友がその馬鹿者に云つた。

「確かに君 NN は名高い悪漢だよ。關係者残らず騙つた奴だよ。その事は誰れでも知つてゐる。君は全く時世遅れた。」と愚人が云つた。

第三の朋友も亦驚いた。そして愚人の言を信じて彼れの朋友を棄てた。而してどんな人でも、何んな物でも此の愚人の前で賞めやうものなら彼は何でもかでも、同じ事を云つた。
 時によると、彼は叱るやうな調子で、かう云ふことを附加へた。

「君はまだオーソリテイを信ずるのか。」と。

彼れの朋友等が、その馬鹿の事を評議し初めた。「害意のある、毒々しい奴だ！ けれ共何と云ふ頭だらう。」

「そして、何と云ふ舌だらう。オ、さうだ、彼には天分がある。」と他のものが附加へると云つた風に。

終には、雑誌記者が、評論欄を受持つてくれと、その馬鹿に云つて来るやうな事になつた。

そして彼は、その様式と、その絶叫とを少しも變更しないで、あらゆるもの、あらゆる人を批評した。

嘗てはオーソリテイに反抗の聲を上げた彼は、今では彼自らオ

ーソリテイになつた。そして青年等は彼を畏敬し、彼を恐れた。

かくの如くして憐れなる青年等は、他に何事が出来やうぞ。一般の法則として、人は何人をも畏敬すべきものではない………が

併乍ら、此の場合、彼を畏敬しなかつたならば、誰れでも全く時世遅れになされて了ふだらう。

愚人は群衆の中で得意であつた。

(千八百七十八年、四月)

「確かに君、その書家は、ずつと前に時代遅れになつて居るのだ。……君知らなかつたのかい。君をそんなとは思はなかつた……君は全く時世に遅れてゐるネ。」と、その愚者が云つた。

朋友は驚いて、直にその愚者に同意した。

「僕の昨日讀んだ書物は大層佳いものだつたよ。」と他の朋友が彼に云つた。

「君耻かしくないのかい。誓つて云ふがその書物は一向つまらないものだ。誰れでもずつと昔しに讀んで了つてるよ。君それを知らなかつたのかい。君は全く時世遅れた。」と愚人が云つた。

此の朋友も亦驚いて、愚人に同意した。

「僕の朋友のNNは實に驚いたものだ。あれこそ、實際寛大な人間だ。」と、第三の朋友がその馬鹿者に云つた。

「確かに君NNは名高い悪漢だよ。關係者残らず騙つた奴だよ。その事は誰れでも知つてゐる。君は全く時世遅れた。」と愚人が云つた。

第三の朋友も亦驚いた。そして愚人の言を信じて彼れの朋友を棄てた。而してどんな人でも、何んな物でも此の愚人の前で賞めやうものなら彼は何でもかでも、同じ事を云つた。

時によると、彼は叱るやうな調子で、かう云ふことを附加へた。

「君はまだオーソリテイを信ずるのか。」と。

彼れの朋友等が、その馬鹿の事を評議し初めた。「害意のある、毒々しい奴だ！ けれ共何と云ふ頭だらう。」

「そして、何と云ふ舌だらう。オ、さうだ、彼には天分がある。」と他のものが附加へると云つた風に。

終には、雑誌記者が、評論欄を受持つてくれと、その馬鹿に云つて来るやうな事になつた。

そして彼は、その様式と、その絶叫とを少しも變更しないで、あらゆるもの、あらゆる人を批評した。

嘗てはオーソリテイに反抗の聲を上げた彼は、今では彼自らオ

ーソリテイになつた。そして青年等は彼を畏敬し、彼を恐れた。

かくの如くして憐れなる青年等は、他に何事が出来やうぞ。一般の法則として、人は何人をも畏敬すべきものではない………が併乍ら、此の場合、彼を畏敬しなかつたならば、誰れでも全く時世遅れになされて了ふだらう。

愚人は群衆の中で得意であつた。

(千八百七十八年、四月)

東方古譚

バグダツドで、誰か宇宙の太陽、ジャファルを知らぬものがあるか。

幾年も前の事、ある日ジャファルは（彼はまだ若かつた）バグダツド附近の地を歩いて居た。

忽ち噎がれた叫びが、彼れの耳に入つた。誰か懸命に救いを求めて居るのだ。

ジャファルは其の時代の青年のうちでは、深慮と敏捷を以て勝れた居た。然しその感情は同情に富んで、深く自分の力量を信じ

て居た。

彼は聲する方に走つた。そして、衰弱した一老人が、二人の山賊のために、町の壁にはりつけられて居るのを見た。二人は老人に追剥を働いて居るのだ。

ジャファルは劍を抜いて悪漢に飛びかゝつて、一人を殺し、他を追放つた。

かくの如くにして、自由にされた此の老人は、救主の足下にひれふして、その衣服の裾に接吻した。そして「豪勇なる青年よ。君が仁侠は報はれずには済むまい。私はこんな下賤なものに見えて居るが、それは唯見えて居るだけである。私は通常の人間ではな

い。明早朝、本市場へ來たまへ。私は泉の傍に待つて居る。決して私の云つた事を疑ひ給ふな」と云つた。

ジアフアルは「成程見た所では、此人は乞丐だ。併し乍ら、起るだけのあらゆる事、それを試して見なければ嘘だ」と、思つて、よろしい、「參りませう。」と答へた。

老人は彼れの顔を見詰めて、そして去つた。

翌る朝、日の未だ出ない位に、ジアフアルは市場へ行つた。老人は既に、泉の大理石の盤に肌をついて、彼を待つてゐた。

黙つて彼はジャルアルの手を執つて、小さな園に彼れを導いた。園は高い壁でぐるつと取圍まれてゐる。

此の園の真中、緑の芝草の上に、見慣れぬ木が生えて居る。

此の木は唯その葉が空色であるばかりで、松柏類のやうであつた。

果實が三つ——三つの林檎が——、上の方に屈つた細い小枝になつて居る。その一つは中位な大きさで、長い形の、牛乳のやうに白いもので、第二は、大きく、圓く、眞赤で、第三のものは、小さな、皺の寄つた、黄色いものであつた。

風もないのに木は力なく、さら／＼と鳴つてゐる。それが丁度硝子の鈴を振つたやうな、鋭い、悲しい聲を出す。それはジアフアルの來たのを知つて居るやうに思はれた。

「青年よ」と、老人は云つた。「かう云ふ事を心得て此の林檎のどれかを一つ取り玉へ、もし、白いのをもいで食へば、あなたは比びのない智者にならうし、若し赤いのを取つて食へば、あなたは猶太人ロスチャイルド位な富豪になるだらう。若し黄なのを取つて食へば年取つた婦人達に好かれるだらう。決心なさい、躊躇しないで。一時間の中に、林檎は凋んで、地の中深く沈んで了ふだらう。」と。

ジャファルは俯向いて、「如何したものだらう」と、考へた。彼は低い聲で、丁度彼自身に云つて聞かすやうに「もし、あまり賢くなり過ぎては、恐らく活きようとしないだらう。もし誰れよりも富

豪になつては、皆が妬むだらう。私は第三の凋れた林檎をもいで食べた方が善からう。」と、云つた。

そして、その通りにした所が、老人は齒のない口で笑つて、斯ふ云つた「賢い青年よ。あなたは善いものを選んだ。白い林檎に何の必要があらう、あなたは實際ソロモンよりも賢いのだ。赤い林檎も亦何にならう、……そんなものはなくとも、あなたは金持になられるだらう。あなたの富だけは誰れも妬まぬだらう」と。

ジャファルは姿勢を正して云つた「上天によりて保護された、われらがケリーフの聖母は何處に在すか御示してください、御老人よ」と。

老人は地の方に低く屈んで青年にその道を教へた。
バクダットでは、誰れも宇宙の太陽、偉大なる、有名なるジャ
フアルを知らぬものはない。(千八百七十八年、四月)

詩の二節

或る町があつた。其處の住民は、非常に詩が好きで、若し何週
間も何か新しい詩が出ないで過ぎるやうな事があれば、このや
うな詩の缺乏は公衆の不幸であると迄観る程であつた。

こんな時には、いつでも彼等は、最も悪い衣服を着て、頭に灰
をふりかけ、公衆の會場に群集して、涙を揮つて、痛く彼等を
見捨てた詩神を責めるのであつた。

斯様な目出度からの或日、青年詩人、ジューニアスは、悲しめ
る多人數の雜沓して居る會場へ這入つて來た。

彼は急ぎ足で、此の目的のために建てた、フォーラムに登つて、
彼が詩を誦したき旨を信號した。

警吏は東桿を振り返し、皆は「静かにしろ！氣を付けろ！」と、
聲高に呼はり、群集は待ちかまへて、静まり返つた。

「朋よ！同僚よ！」と、ジューニアスが聲高く初めた。併し十分落
付いた聲ではなかつた。

「朋よ、同僚よ、詩の女神を愛するものよ。

爾、美と光榮とを崇むるものよ。

暫し暗ければとて、心を痛むる勿れ。

爾が心情もて祈る所のものは近づけり、光はやがて暗を破ら
ん。

ジューニアスは息めた、……すると彼に答へて、會場の諸方
から唸音や、笑聲が騒がしく起つた。

各々の顔は彼れに向つて憤激に燃え、各々の眼は憤怒に輝き、
各々の腕は振り上げられ、而して威嚇の拳を振つた。

「あんな事で、吾々をごまかさふと思つてやがる。」と、怒つた聲
が哮る。「下らないへば詩人をフォーラムから引きずり下ろせ！、
馬鹿を退去ませ！念入りの馬鹿に、腐れ林檎と、臭い卵子を呉れ

てやれ！石をくれ——此處へ石を！」
 ジューニアスはフォーラムから、向ふ見ずに走つた………併
 し家へ着かない内に、彼は熱心な喝采の聲と、感嘆の叫び聲を聞
 いた。

不思議に思つて、ジューニアスは、尙人に見付からないやう
 にして（それは激昂して居る獸等を怒らす恐れがあるからだ。）
 會場へ歸つた。

して、彼は何を見たか。

群れ居る人々の上に高く、彼等の肩の上に、黄金の、平な楯に
 乗つて、紫の寛袍を着、流れる垂髪には月桂樹を捲いて、彼の敵

なる青年詩人、ジューリアスが立つて居る………而して群衆は、
 彼を圍繞いて叫んで居る、「萬歳！萬歳！不朽のジューリアス萬歳
 ！彼はわれ等の悲み、われ等の大なる憂愁を慰めた。彼は密よ
 りも甘い、シンバルの音よりも楽しい、薔薇の花よりも香りの好
 い、天の空色よりも尙清らかな詩をわれらに與へた。彼に凱旋式
 を行ひ、此の天才の頭を、香の柔かなかほりで包め、その額を櫻
 欄の葉で扇ぎ、涼ませ、彼れの足もとに、アラビアの没薬のあら
 ゆる芳香を撒けよ！萬歳！」と

ジューニアスは稱賛に狂つて居る人々の一人の處へ行つて「モ
 シ貴下、ジューニアスは何んな詩を歌つて、あなた方をこんな

喜ばしたのか、教へてくださいますか。私は残念ながら、詩を誦して居る時會場に居なかつたのです。どうか、御記憶ならばも一度云つて下さい。」と云つた。

問はれた人は勇ましく「あんな詩は、殆んど忘れる事は出来ない。私を何う間違へたのか。聞き給へ、そして吾々と一所に歡び給へ。」

「詩神を愛するもの等よ」と、神格、ジュリアスが始めたのだ。

「詩神を愛するものよ、同僚よ、友よ。

美と榮と樂とを崇むるものよ！

幽暗によりて、爾が心を怖れしむる勿れ！
望みし時は來たれり！日は夜を破らん！

「君何う思ひますか？」と答へた。

ジュリアスは叫んだ「オヤツ、それは私の詩だ！ジュリアスは、私が詩を誦した時群集の中に居て、聞いて居たに違ひない。そして、それを少し變へて、併し善くしたのではなかつて、唯言葉を僅か變へて、繰返して云つたのだ。」

彼れが呼び止めた市民は、顔を覺めて云ひ返した。「はあ！解つた。貴様はジュリアスだな。嫉妬深い奴！馬鹿ッ！………不吉

な野郎奴、ジューリアスが『日は夜を破らん』と云つたのが何んなに莊嚴だか、鳥渡考へて見ろ！それに貴様のは何だ、面白くもねえ、『光は暗に消さん。』何が光りだい、何が暗だい。』
 「だつて、それは同じぢやないか。」とジューリアスが云はうとす
 ると……

「愚圖く云ふない。皆んなを呼ぶぞ、……皆んな來れば貴様を引裂いて了ふだらう」と、ものも云はせない。

ジューリアスは賢くも逆はなかつた。併乍らその會話を聞いてゐた白髪の老人が此の不幸な詩人の處へ來て、彼の肩に手を置いて云つた。

「ジューリアスよ、君は君自身の思想を咏つたのだ、けれ共それは適當な時ではなかつた。彼れは自らの思想を咏つたのではない、併し時が善かつた。それで彼れは全く正しいものになつた。併し君には、善良なる良心の慰藉が残されてゐる。」と

けれ共、彼れの良心が、その全力を盡して——實を云へば十二分と云ふ所ではないが——ジューリアスが、一方で衝き出された時に、彼れを慰めて居る間に、遠くには、稱讚と歡呼との叫びの中に、紫金に輝く全勝の日の光を受けて、額には月桂樹の隱影を浮べ、恰も凱旋して、その王國に歸る皇帝のやうに、重々しく、悠然とかまへて、高價な焼香の動搖く雲の中に、傲然とつき立つた

ジューリアスの像が動いてゐた……棕櫚の長い枝が、丁度彼れの詩に酔つた市民の、胸の内に漲る常に新らしい讚美の情を、そのやはらかな顫動と、その低身恭敬の中に云ひ表はして居るやうに、彼れの前に上つたり、下つたりして居た。

(千八百七十六年、四月)

雀

私は獵から歸つて、並木道を歩いて居た。犬は私に先だつて走つて居る。

犬は突然小足になつて、丁度獲物の跡をつけるやうに、忍び足に歩み出した。

私は並木道をずっと眺めて、一羽の子雀を見出した。嘴のあたりと頭の下の方は黄色だつた。それは巢から落ちたのだ(風が強く並木道の赤楊をゆさぶつて居た)而してまだ半分しか成長してゐない羽を、徒らにバタ／＼とさせて、動く事も出来ないで居た。

私の犬はそろりと近づいて行つた。その時突然、すぐ側の木から、喉の黒い、大きな雀が、石のやうに、真直に犬の鼻の前に落ちて来た。全身の羽毛を悉く逆立て、恐れ戦いて、絶望の憐れな鳴聲を上げて、激怒し、恐怖して、幾度も光る齒列の開いた顎の方へ飛んだ。

それは救げに来たのだ。雛の前に身を投げだしたのだ……小さな身體は、凡て恐怖に震えて、その聲は怪しう皺噎れてゐる。卒倒せんばかりに怖れながら、彼はその身を献げて居る。

彼れの目には、犬は非常に巨大な怪物に見えねばならぬ！けれど共、彼は危険氣のない、高い枝に止まつて居る事が出来ない……

彼れの意志よりも更に強い力が、彼を飛び降ろさしめた。

ジツと立つて居た、私のツレソルはあとしさりした。……明

らかに彼れも亦此の力を認めただ。

私は急いで不機嫌な犬を呼んで、十分尊敬の念を以て彼處へ行つた。

さうだ、嗤ふ勿れ私はその小さな、勇ましい鳥に對して、彼れの愛の本能に對して尊敬を感じた。

私は思ふ。愛は、死、もしくは死に對する恐怖よりも更に強い。唯それによりてのみ、愛によりてのみ、人生には共同があり、進歩があるのであると。(千八百七十八年、四月)

頭 骸 骨

豪奢な、あかしくと照らされた室に、澤山の紳士や淑女が居る。
皆の顔は活氣を帯びて、話もはづんで居る……ある有名な歌
妓に就て騒がしく話して居るのだ。彼等は彼女を神の如きものだ、
不朽のものだと云つて居る、お、昨日のあの女の最後の震聲は、
實にうまかつた！

そして、忽然、丁度魔術師の杖を振つた時のやうに、皆の頭、
皆の顔から、皮膚の美しい覆いが取れて了つて、端的に死白色の
頭骨が露出される。其處此處に、露骨の顎や鉛色に、ピカピカと

光つた齒齦がある。

恐々乍ら私は、それらの、顎や齒齦の回はる所やまたそれら
がランプや蠟燭の光にぎらぐら輝く所を見た。ザラ／＼とした、
骨の球や、そして其等の中に他の更に小さな球、何の意味もない、
眼の球が回轉するのを見た。

私は自分の顔に觸つて見る事も、鏡に映して見る事も、思ひ切
つて出来なかつた。

而して、頭骨は矢張、彼方此方振向きあつて居る。前と同じ騒
がしさで、白い齒の間から敏捷な舌が、赤い布のやうに覗き乍ら、
實に驚くべく、實に真似難く、不朽を語つて居る……然り、不

朽なる……歌妓はその最後の顫はしをやつた。

(千八百七十八年、四月)

労働者と白い手の人

労働者、「なせお前は俺等の所へ這入込んで来るんだ。何の用事だ。手前は俺等の仲間じゃえい……あつち行つてろ！」

手の白い人、「私あ君達の仲間だ。」

労働者、「俺等の仲間だ！馬鹿ア云へ。俺の手を見ろ、此の穢なさを見ないか、肥料の臭ひや、瀝青のかざがしてゐる……それにお前の手を見ろ、白いじゃ無えか。お前の手は何んなかざがしてゐるんだ。」

手の白い人、「手を差出して」「嗅いで見てくれ。」

労働者、(その手を嗅いで)「妙な香ひだね、鐵のにはひのやうに思へるが。」

手の白い人、「然うだ! 鐵だ、六年の間も、私は手に鎖を着けてゐたのだ。」

労働者、「何のために。」

手の白い人、「ナニ、君達の爲になるやうに働いたからだ。壓制されたものや、無智なものを、自由にしようとしたからだ。君達を壓制する奴等に反對して、人民を煽動した。官憲に抵抗した……それで、彼等は私を禁鎖つたのだ。」

労働者、「禁鎖つたつて? 彼奴等が? 抵抗したのは立派な事だ!」

二年経つた。

同じ労働者が、も一人の労働者に「オイ、ペテ……」昨年手の白い野郎が、手前と話して居たのを記憶えて居るかい。」

他の労働者、「記憶えてるよ……それが何うしたんだ。」

初めの労働者、「聞いて見ると、彼奴ア、今日絞殺げられるんだと

よ。命令でね。」

次の労働者、「矢張、官憲にすつと抵抗つてたのかね」

初めの労働者、「やつてたんだよ」

次の労働者、「あゝ、……おい兄弟、彼奴を絞る繩の端を、握る事ア出来ねイもんだらうか。家に福が来るていせ。」

初めの労働者、「善いだらう。やつて見ようぢやア無えか兄弟」

(千八百七十八年、四月)

薔 薇

八月の終り頃の日……もう既に、秋になつて居た。
日は沈みかけて居た。雷も電光もなしに、俄夕立が、廣い平原
の上をサツと通つて行つた所だ。

家の前の花園は、夕陽の火に照され、多量の雨を浴びて、キラ
〜と輝いて、水分を蒸發させて居る。

彼女は客室のテーブルに向つて坐つて居た。そして何か深い物
思いに耽つて、半分開いた戸口から、花園の方を見入つて居る。

私は其時、彼女の心の裡に、起つた事を知つた。其時、彼女は

短かい、然し劇しい闘をして、最早勝つ事の出来ない、ある感情に服従して了つたのを知つて居た。
突然、彼女は起上つて、足早に花園へ出て、そして、見えなくなつた。

一時間経つた……また一秒。彼女は歸らなかつた。

そこで私は起ち上つて、家の外に出た。私は彼女の行つた道——それを行つたに違ひない——に向つた。

既に夜になつて、四邊は暗かつた。けれ共道のジトくした砂の上に、圓いやうなものを認める事が出来た——霧を通してさへもそれは濃紅に見えた。

私は屈んだ。それは活々した、咲きだての薔薇であつた。二時間前に私は、此の花を、彼女の胸で見たのだ。

私は注意して、泥の中に落ちて居る花を、拾ひ上げた。而して、室へ歸つて、それをテーブルの上の、彼女の椅子の前へと置いた。而して今、竟に彼女は歸つて來た、軽い歩行で、室を横切つて、テーブルに對つて座つた。

彼女の顔は一層蒼白く、然も一層生々して居た。伏目勝ちの彼女の眼は、少し小さく見えて、嬉しくて堪へられぬやうに、彼女此方、彷徨つて居た。

彼女は薔薇に目を着けて、それをつかみ上げ、壓潰されて、泥

まみれになつた花瓣を見て、私を眺めた。そして彼女の眼はじつと据つて、涙がその中に輝いた。

「なぜ泣くの？」私は尋ねた。

「此の薔薇を御覧なさい、此んなになつて了つて。」
其時私は意味深い言葉を、巧く云はうと考へた。

「あなたの涙はその泥を洗ひませう。」と、私は意味あり氣な面色で云つた。

「涙は洗うんぢやなくて、燃すんだわ。」と、彼女は答へた。そして、爐の方へ向いて、消えかゝつて居る火焰の中に、その薔薇を投げた。

「涙より火の方がよく燃やすわ。」と、彼女は快活に云つた。そして、美しい眼には、矢張涙を光らせて、彼女は高く、愉快そうに笑つた。

私は、彼女も亦、火の中に居たと思つた。

(千八百七十八年、四月)

最後の面會

われ等は嘗て、親しい、温かい朋友であつた………けれ共、不幸なる時が來た………われ等は敵となつて別れた。

幾年も經つた………そして、彼れの住んで居る町に來て、私は彼れが病氣で、もう見込のない事、また私に會ひたがつて居ると云ふ事を聞いた。

私は彼れの處へ行つて、彼れの室へ這入つた………二人の視線は會つた。

私は辛うじて、彼れを知つた、あゝ！病氣は彼れを非道いもの

最後の面會

にして了つた！

黄色く、皺が寄つて、全で禿げて、疎らな、白い髭を生やして、彼れは態と、廣く縦に裂いた、一枚の襦袢の外何も著ないで坐つて居た………彼れは極軽い着物でさへも、その重みに堪へ得ないのだ。

焦々して彼れは私の方へ、恐ろしく、瘦せた手を差延べた、丁度、蝕壞されたやうな手だ。力んで、何だかわけの分らぬ言を少し云つた。歓迎したのか、責めたのか、誰れが解るものか。彼れの瘦せた胸は高まつた。そして、彼れの光つた眼の、力のない瞳孔には、苦痛の、固い、痛い涙か二粒轉つた。

私は氣か滅入つた……私は彼れの側の椅子に腰をかけた。そして、その怖ろしさと、氣味悪るさに、思はず目を落して、私も亦手を差出した。

けれ共、私の手を握つたのは、彼れの手では無いと思はれた。われらの間に、丈高い、静かな、白い女が坐つて居ると、私には思はれた。長い外衣で、頭から足まで纏つて居る。その女の窪んだ、光輝のない眼は空を見入つて、何等の聲も、彼女の血の氣のない、固く結んだ唇から洩れない。

此の女が、われ等の手を結付けた……此の女がわれ等を永久に仲直りさせたのだ。

然り……死がわれ等を仲直りさせたのだ。

(千八百七十八年、四月)

滅ぼされた、バルガリーの村で、倒れた家がすぐに間に合せの野戦病院と變つた、庇護所の中に、塵埃の上に、惡臭い、濕つばい藁を敷いて、彼女は二週間の上も、窒扶斯で死に瀕して、横はつて居る。

彼女は無意識になつて居る、然も、一人の醫者も彼女を見舞ふ事さへしなかつた。彼女が足の續く限り、看護した病兵等は、今度は自分等の番に、病の床から起上つて、裂れ鍋の窪みに數滴の水を、彼女の乾燥だ唇に注いで居る。

彼は若い、美しい女であつた。彼女は廣く世間に知られて居た。最も高位の人々でさへも、彼女に思ひをかけた。令嬢達は彼女を妬み、男の人達は彼女の機嫌を取つた……二三人彼女を竊かに、また眞實に愛して居た、人生は彼女に微笑を呈した。併し世には涙よりも、まだ惡い微笑がある。

柔かな、温かい情……それに、斯様な力、斯様な献身の熱情！救助を要するものを救ふ事……それ己外の幸福を彼女は知らなかつた……幸福を知らなかつた、而して、竟にそれを知らなかつた。凡て他の幸福は彼女を通り過ぎて了つた。然し彼女はそれに自分の心を決した、そして、抑へ難き信仰の火に熱し、輝い

て、彼女は身を舉げて、彼女の隣人に盡した。

彼女の胸深く、彼女の最も秘密なる心の裡には、何んな秘寶が埋められてあるか、誰れも知らなかつた。而して今に至つては、無論永久に誰れにも分らぬのであらう。

あゝ、知ればとて、何になるか。彼女の犠牲は成され………彼女の事業は成就した。

然し、たとひ彼女は遠慮して、何んな禮も享けないにしても、彼女の死骸にすら、誰れも感謝の辭を述べないのを思ふと、悲しくなる。

彼女の親愛なる亡靈よ、此の、時に遅れた花を許し給へ、敢て

私は、それを彼女の墓の上に置く。(千八百七十八年、九月)

訪問

私は窓を開放して坐つて居た……朝、五月一日の朝早く。
 黎明には、未だならなかつた。けれ共、既に暗い暖かな夜は、
 曙の近づくに連れて、白くなり、冷たくなつて行く。
 霧も昇らず、風も動かない、凡て無色で、沈静であつた。……
 併し、覺醒の近づいた事は感ぜられた。そして稀薄な空氣は鋭く
 香つて、露でじとくとして居た。
 忽然、開いた窓の所へ、鳥の飛ぶやうな音と、サラ〜と軽い
 音がして、大きな鳥が私の室へ飛込んで來た。

訪問

私は驚いて、それを、よく〜見た。それは鳥でなくて、幅の
 狭い、長い上着を足迄着流した、小さい羽翼のある女であつた。
 彼女は、全然灰色、眞珠母の色であつた。唯その翼の内側に、
 開いた薔薇の、柔かな赤味が、照つて居るばかり。
 彼女の小さな圓い頭に、振亂れた捲髪には、谷百合の花圈が纏
 はれて、二本の孔雀の羽が、蝶の感鬚のやうに、彼女の愛らしい
 圓い額の上に、面白さうに動いて居る。
 彼女は幾度も天井のあたりを飛び廻つた。彼女の小さな顔は笑
 つて居る、その大きな、はつきりした、黒い眼にも笑が見えた。
 彼女が樂し相に飛び廻つて、愉快相に跳ね回るので、彼女の眼

必然——力——自由

(薄肉彫)

鐵のやうな顔をした、鈍い、じつと見据へた眼容の、丈高い、骨張つた老婆が、大股に踏張つて、棒のやうに乾いた手を、今一人の女の前に差出す。

次の女は——ヘルキュレスのやうな筋肉を持つた、力のあり相な、實の充つた、巨大な身長で、その太い頸に、小さな頭が乗つて居て、而も盲目である——今度は、小さな、瘦せた小女の前に手を出して居る。

此の小女だけは、見える目を以て居る。彼女は、美しい、繊かな手を舉げて、反抗し、振り廻して居る。彼女の顔には生氣が充ちて、焦慮と奔放の氣が表はれて居る……彼女は服従ふまいとして居る、彼等が連れ行く所には行くまいとして居る……然し、矢張、彼女は服従つて、そして行かねばならぬのだ。

必然——力——自由！

誰が是れを變へる事が出来よう。

(千八百七十八年、五月)

布 施

大都市の近く、廣い大道を、病んだ老人が通る。

彼はヒヨロ／＼して歩いて居る。彼れの、老いて、瘦せこけた足は、跛ひき、曳きすられ、躓いて、丁度、彼れの足でないやうに、苦し相に、弱々しく運んで居る。衣服は、襤褸になつたのを身に纏つて、露出の頭を、胸の所迄垂れて……彼は全然疲れ切つて居るのだ。

彼れは路傍の石に腰を下ろして、前の方に屈んだ。膝に肘をついて、手で顔を隠した。その節高い指の間から、涙が灰色の、乾

施 布

いた塵埃の上へ滴り落ちる。

彼れは想起した……

彼れも亦、健康で、金持ちであつた事、その健康を壊して了つた事、その富を他人のために、朋友にも敵にも爲に、浪費して了つた事等を想起した……而して、今では彼れは、麵包の外殻も持つて居ない。そして、凡ての人は彼を棄てた、朋友も、また以前の敵ですらも、彼れを相手にしなくなつた……彼れは施しを乞ふ迄没落らねばならぬのか？ 彼れの心の中には苦痛を感じ、恥辱を感じた。

涙は尙滴々として、灰色の塵埃の中に落ちる。

忽然、彼れは、誰れかゞ彼れの名を呼ぶのを聞いた。その疲れた頭を擧げると、彼れの前に見慣れぬ人が立つて居る。静穩な、眞摯な、然し嚴酷しい所のない顔。はつきりとした、併し爛々するやうな事のない目。心の奥迄見通すやうな容貌ではあるが、毫しも不親切なやうな所は見えなかつた。平靜な聲で「あなたは、あなたの金を皆んな消失て了つた……然し、たしかに、あなたが善をなした事を、悔いはしますまい」と云つた。

「その事は悔いませんが、私は此處に死にかけて居ます。」と、老人は大息して、對へた。

見慣れぬ人は語を續いで「して、あなたの前に手を出さない乞丐が居ましたか。若しあなたが、善をする對手が居なかつたとしても、あなたは、善い行を爲る事は出来なかつたのでしやう」

老人は何とも返事しないで、考へ込んだ。

見慣れぬ人は再び初めた「だから、あなたも亦、今は高く止まらないで、行つてあなたの手をお出しなさい。そして、あなたも亦、他の善人に、彼等が善人であると云ふ事の證據を、行爲に表はすやうに、機會を與へておやりなさい。」

老人は驚いて、彼の目を上げた………けれ共、見慣れぬ人は既

に消え去つて、遠くの方から一人の男が、その道を歩いて來るのが見えた。

老人は近づいて、手を出した。その男は、むづかしい顔を背けて、何も興れなかつた。

然し、彼の後に、今一人の人が通つて、此老人に僅かばかりの施物をした。

老人は貰つた金で、自ら麵包を買つた。そして乞食して儲けた僅少の食物が、彼には美味く思はれて、其の心には毫しも羞恥の念がない。のみならず反つて、平和と歡喜が來て、彼れを祝福した。(千八百七十八年、五月)

蟲

私は斯んな夢を見た。吾等は二十人程で、窓を開放した、大きな室に座つて居た。

吾等の中には、婦人も、子供も、老人も居た……吾々は何でも非常に名高い問題に就いて、がやくくと、要領を得ず話しあつて居た。

不意に、鋭い、ヒウと云ふ聲がして、長さ二寸ばかりの、大きな虫が室に飛び込んだ……それは飛び込んで、ぐるぐると翔ち廻つて、そして、壁に止まつた。

それは蠅か、山蜂のやうであつた。その身體は泥色で、またその扁平な、硬ばつた翼も同じ色であつた。擴がつた、羽毛の生えた爪、蜻蛉のやうな、太つた、角のある頭。その頭も爪も、丁度血に浸したやうに紅かつた。

此の變つた蟲は、絶えず頭を、上下左右に振つて、その爪を動かして……そして、不意に壁を離れて、羽搏して、室中を飛回る。そしては、また止まつて、其場を動かさず、再び、憎らしく、厭らしく、全身を揺り初める。

その虫は吾々皆の心に、嫌厭な、戰慄とする感じ、恐怖い感じを迄惹起した……吾々の内に、こんなものを見た人は誰れもな

い。吾々は一齊に「此の奇怪なものを追ひ出してしまへ」と、叫んで、遠くから、それにハンカチを振つた。……けれ共、誰れも、それに近づかうとはしない……そして虫が再び飛び初めた時に皆なは思はず逃げた。

吾々の仲間に唯一人、蒼白い顔の青年が吾々を不思議相に眺めて居た。彼は肩を聳かして笑つた。そして、確かに、何ういふ事が、吾々に持ち上がったのか、また何故吾々が斯んなに騒いで居るのか、曉る事が出来なかつたのだ。彼自らは、全く虫を見ず、またその翼の、縁起の悪い羽搏きをも聞かなかつた。

此の青年を睨んで居るやうに見えた虫は、直に飛んだ。そして

彼れの頭に止まつて、額の、眼の上の所を刺した……青年は力なく唸つて、そして倒れて死んだ。
 怖ろしい蠅は、直に飛んで出た……吾等は其時始めて吾等を訪うた謂を曉つた。(千八百七十八年、五月)

キヤベツの肉汁

ある百姓の寡婦に、一人息子があつた。二十歳の青年で、村では一番の働手であつた。そして、それが死んだ。
 村の持主なる夫人が、その女の不幸を聞いて、葬式の日に彼女を訪ねて行つた。

彼女は家に居た。

小家の真中で、食卓の前に起つて、彼女は、落着いて、右手を正しく動かして、(左の手はぶらりと下つて居た) 黒くなつた鍋の底から、薄い、キヤベツの肉汁を抄ひ上げては、それを匙に何杯

もく飲んで居る。

その婦人の顔は打ち沈んで、陰氣であつた。その眼は赤く腫れ上つて居た………けれ共、彼女の態度は、教會に居るときのやうに、シヤンと眞直になつて居た。

夫人は思つた「あゝ、あの人は、斯んな時にでも、物を食べる事が出来るのだ………この人等の社會は、何と云ふ粗野な感情を持つて居る人達ばかりなのであらう。」

その時、夫人は、數年前自分が、九ヶ月の娘を失くした時の事を想起した、その時彼女は悲しくつて、ペテルスブルグの近くにある、好ましい田舎の別荘を捨て、一と夏町で暮した事であつ

た、斯う思つて居る間も、女はキャベツの肉汁を飲み續けて居た。夫人は我慢が爲切れず、竟に「タティアナ！」と云つて………「まア！驚いた。息子の事を思はないなんて、そんな事が出来るの！食べたいといふ思が失くならないのが不思議だわ。何うしてそんなスープなんかど、食べられるのでせう！」

「ウシアは死にました。」と、その婦人は靜かに云つた。そして、悲痛の涙が、更に彼女の凹んだ頬を流れる「それはもう、彼れの死んだのは、私にも最後でした。私あ、生きながら胸を引裂かれるやうです。けども肉汁を駄目にしちやありません、鹽が入つて居るんですから」

夫人は唯、肩を縮めて、行つて了つた。鹽は彼女に取つては、
左程貴いものではなかつた。(千八百七十八年、五月)

空明の國

おゝ、空明の國！おゝ、光明と色彩の國、青春と幸福の土！私は
夢で爾を見た。われ等は二三人で、共に華麗しく飾つた、美し
い、小さな短艇に居た。風に翻へる旗の下に白帆が、鵠の胸のや
うに、孕れて居た。

私は誰れと居たのか知らない。然し、確かに彼等か皆若くて、
快活で、皆私のやうに幸福であつたと感じた。

然し、私は實に彼等を見なかつた。私は何處を向いても、限りの
ない、蒼々とした海を見た、小波は黄金の鱗のやう。そして、

頭の上にも同じ果てしのない蒼海、……その中に、恰も勝誇つたやうに、愉快さうに太陽が動く。而して、われ等の間に、時々、神達のそののやうに銀鈴を振つたやうな、歡喜の笑聲が起る。

フイと誰れかの唇から言葉が出る、それは神の美と、感興と、威力との歌……それに天は會釋の反響を降し、海はそれに和して震ふやうに思はれる……而して後、また盛福の寂寞が續く。われ等の短艇は柔かい波浪の上に、軽く泛んで、迅く走る。毫しの風も舟を追つて居ない。われら自らの、軽く脈打つ心臓が、それを導いて居るのだ。船は活きたものゝやうに、われ等の思ひ

通り従順に漂ふ。

われ等は島に來た、紫水晶や綠柱玉の寶石の、三稜鏡を通して來るやうな光りの充ちた、半ば透明の、綺麗な島だ。混雑た芳ばしい香氣が、周圍の濱邊から昇る。此等の或る島では、薔薇や、合百合の雨をわれ等にふりかける。或る島からは虹霓の色の、長い翼の鳥が翔ち上る。

鳥はわれ等の頭上に圓を描いて飛び、百合の花や、薔薇の花は、われ等の船の側を滑らかに流れる眞珠のやうな泡の中に溶け去る。そして、その花、その鳥に、響音が、密のやうな甘い響きが、われ等に漂ふ……女の聲がその中に聞かれる……われ等の

周圍の凡ての物、空、海、帆桁に脹れる帆、舵の所にどくどくと湧く水——凡ては戀を語つて居る、甘き戀を語つて居る！
 そして、彼女、われ等凡てが愛して居る——彼女は其處に……
 見る事は出来ないが、近くに居る。やがて、見よ、彼女の眼は爾に輝き、彼女の微笑は爾に花咲くであらう……彼女の手は爾の
 手を取つて、凋落のない、歡樂の國に導くであらう！
 おゝ、空明の國！夢の中に私は爾を見た。

(千八百七十八年、六月)

二 富豪

富豪ロスチャイルドは、その巨萬の収入の中から大層な金を子供の教育に、病人の看護に、老人の扶持に寄附すると云つて、彼れを褒めるのを聞いた時、私は嘆美し、感動した。

けれ共、私が其れを稱讚し、その話しに感動して居る時でも、私は孤兒の女姪を、倒れかゝつた、小さな自分等の小屋に引取つた、貧乏な農夫を想ひ起さずには居られない。

「もし、カトカを引取るとすると、財布の底を叩いて、養つてやりませうね、私等は鹽を買ふ事も、麵包片に鹽を付ける事も十分

ぢの有りますまいよ。」と女が云へば、
「可いとも、鹽がなくなつたつて、やつて行けるさ。」と、亭主の農
夫が答へる。

ロスチャイルドは竟に此の農夫に及ばない。

(千八百七十八年、五月)

老人

暗黒、荒涼の日は来た………汝自身の虚弱、汝の愛するも
の等の苦痛、老年の喪氣、憂愁。凡て汝が愛したものの、その爲
めには云ふに云はれぬ苦勞をなしたも凡ては、落ちて、断々に
なる。道は凡て降り坂である。

汝の爲し得る事は何か？憂愁か？訴愁か？汝は自らにも、また
他人にも、その道を行かしまるを欲しない………

撓んだ、凋れた木の葉は、小さくて、少ない。然し、その緑
は矢張變らない。

汝もまた畏縮め。汝自らの中に、汝の記憶の中に退き隠れよ。その時、そこに、汝のみ老年の秘鍵を有つてゐる、其中に向けられた深き心の底には、春のあらゆる芳香と、あらゆる鮮緑と、あらゆる光榮と、力に充ちた光明とが、再び汝に示さるゝであらう。然し老人よ！注意して……前途を望まぬよう。

(千八百七十八年、七月)

探訪員

二人の朋友が卓子に座つて、茶を喫んで居た。突然、町に物騒がしい聲が起る。惘然な唸き聲、猛り狂ふ罵り聲、毒々しい笑ひ聲が聞える。

「誰れかをなぐつてるんだ。」と、その一人が窓から眺めながら云ふ。

「罪人か？ 人殺しか？」と、今一人が問うて

「オイ、それは何にしても、吾々はそんな不法な責罰を許す事は出来ない。行つて、そいつの味方になつてやらうではないか。」

「だつて、奴等の打つて居るのは人殺しぢやない。」
「人殺しぢやない？ぢや盗人か、同じぢやないか。行かうとして其奴を群衆の中から連れて出ようぢやないか。」

「盗人でもないよ。」

「盗人ぢやない？ぢや逐電した會計吏か、鐵道重役か、陸軍請負人か、露國文藝の保護者か、保守黨記者か、社會改革者か……何れにしても行つて救つてやらうぢやないか。」

「否や、皆なで打つてるのは、新聞の探訪員だ。」

「探訪か？それぢや君、まあ茶を喫んで了つてからにしよう。」

(千八百七十八年、七月)

二人兄弟

それは幻覺であつた……

二人の天使が私に顯はれた……二人の精靈。

私は天使、精靈と呼ぶ。何故なれば二人共裸體で衣服を着て居ない、そして彼等の肩には長い、強さうな翼があつたから。

二人共若い人であつた。一人は肥満した方で、その肌は柔かで、滑か相で、その捲髪は黒かつた。彼れの目は褐色で、ぱつちりして居て、濃い睫毛が生えて居た。彼れの容貌は敏捷らしく、愉快さうで、そして熱心らしく見えた。彼れの顔は人を魔するやうな、

魅するやうな、而も、少し傲慢な所があつて、少し悪意のあるやうにも見えた。彼れの實の充つた、紅い唇は微かに顫へて居た。その青年は凡ての力あるものゝやうに微笑んで居た——自尊らしく、倦怠さうに微笑んで居た。莊嚴な花圈が彼れの美くしい捲髪に軽くかゝつて、天鷲絨のやうな眉毛に觸れかけて居た。班點のある豹の皮に、黄金の箭を着けて、彼れの彎曲つた肩から、圓々とした腿迄かく羽織つて居た。翼の羽毛は薔薇色に彩られて、その端は、丁度零したての猖紅の血に浸したやうに深紅色である。そして、始中終、その翼は、心地のよい銀の響き、春雨の音をさせて、迅速に動いて居た。

今一人は瘦せた、黄色い肌で、呼吸する毎に肋骨が弱々しく動いて居るのが見られる。彼れの頭髮は清らかで、細くて、真直だ。その眼は大きく、圓く、褪せた灰色で、……その眼付は不安さうに、異様に輝いて居た、凡て彼れの容貌は鋭い小さい半ば開いた口には尖つた、白魚のやうな齒が見えて、撮み上げたやうな鵞つ鼻、白い絨毛の一面に生えた、突き出た願。乾燥いた唇には未だ嘗て微笑を含んだ事はない。

巧妙に彫まれたやうな顔ではあるが、恐ろしい所があつて、憐愍を加へられない。(初めの美しい青年の顔も甘い所、愛らしい所はあるが、毫しも憐愍を引くべき跡を示さない。)第二の青年の頭

には少しの、断れた、實のない、穀物の穂が、凋れた草の莖で縛つてあるのが纏き付けてある。粗末な、灰色の布を腰に巻いて、鈍黒の灰色した、後部の翼をゆるく、威嚇すやうに動かして居た。此の二人の青年は、離るゝ事の出来ない仲間と見えた。二人は互に肩に凭れあつて居た。初めの青年の、葡萄の總のやうな、柔かい手は第二の青年の骨だらけの肩の上に置かれ、第二の青年の瘦せた腕は、その細長い指を以つて、初めの青年の、小女のやうな胸に、蛇のやうに纏つて居た。

而して私は聲を聞いた、その聲は斯う云つた。「爾の前に立つて居るのは「愛」と「餓」だ——これは双生の兄弟で、あらゆる生

けるものゝ二つの根石となつて居る。

凡ての生けるものは食を得んが爲に働く。そして、若きものを産まんが爲に食ふ。

「愛」と「餓」——彼等の目的は一である。それは個人の生命、他人の生命——同じ一般の生命を絶えさせない爲だ。

(千八百七十八年、八月)

主我主義者

彼れは彼れの家族の鞭笞となるには、十分な資格を有して居た。彼れは健康に生れ、富んで生れた。そして彼れの長い、全生涯を通じて、富と健康が續いたので、彼は決して一罪をも犯さず、決して一過失にも墮らず、決して一度も錯誤や間違ひをやつた事はなかつた。

彼は非難のうちやうのない良心的の人であつた！……そして、彼自身の良心の感じを最上のもと思ひ、其れを以つてあらゆる人、彼れの家族、彼れの朋友、彼れの知己を壓服した。

彼れの良心は彼れの首脳であつた……そして彼れはそれに対して法外な権利を興へた。

彼れの良心は彼れに、無慈悲である事、また良心が彼れに命じた事以上に、何んな善も爲ないと云ふ権利を興へた。そして彼れは無慈悲であつた、善を爲なかつた……なせなれば命せられた善は、畢竟するに善ではないからである。

彼れは彼自身の儀表的自我を除いて、何者にも興味を持たなかつた。而して若し他人が孜孜として、其れに興味を取らない時に、彼れは本氣になつて憤るのであつた。

その癖彼れは、自分を主我主義者と考へて居ない、そして主我

主義者や、主我主義を罵る事、殊に厳しく、それ等を暴露する事に殊に鋭い。

確かに彼れは主我主義者だ。他人の主我主義が自分の邪魔になるのだ。

自分自身の内に、最小の弱点も認めないので彼れは他人の何んな弱点も了解せず、また堪へる事もしない。實際、彼れは何んな人をも、何んな物をも了解しない、何となれば、彼れは、上下前後、あらゆる方面に彼れ自らによつて圍繞かれて居るのだから。

彼れは、容赦と云ふ事の意味すら了解しない。彼れは決して彼自身を赦さねばならぬ事は無かつた……何の理由で他人を赦す

事が出来やうか？

彼自身の良心の法廷では、また彼自身の神の前では、彼れ、此の驚くべき、道德的怪物は、天を仰いで、はつきりした、訥りのない聲で宣言した「然り、私は儀表である、真に道德的の人間である。」と

彼れは此の言葉を臨終の床に迄繰返した。而してその時ですらも、彼れの石のやうな情——汚點も瑕疵もない、その情には何等の鼓動もなかつたのであらう。

あゝ、厭な自己満足の、何の事なしに、廉價く購なはれたる道徳よ！汝は殆んど惡徳の明らさまに嫌厭ふべきものよりも更に惡

むべきものである。(千八百七十八年、十二月)

神の饗筵

一日神がその青空の宮殿で、大饗筵を催はさうと思はれた。
あらゆる貞節の人が招待された。唯貞節の人……男子は招か
れなかつた……唯令嬢達だけ。

大徳、小徳打ちませて、大變な參集者であつた。小徳の人達は、
大徳の人々よりも、更に愉快に、楽しさうであつた。けれ共、彼
等皆上機嫌に見えた。そして、ほんの近い親族又は朋友のやうな
人々であつたので、彼等は共に面白さうに語つた。

けれども、神は、全く不案内らしい二人の令嬢に目をつけられ

た。

主人役はその内の一人に自分の腕を與へ給ひて、今一人の令嬢の所へ導かれた。

初めのを指ざし給ひて、神は「仁愛！」と宣うた。

次のを指ざし給ひて「感謝」と仰せられた。

二人の有徳は、云ひやうもなく有難かつた。世界が創まつて以

來、それは永い時間を経たのであつたが、彼等の始めて會つたの

は此の時であつた。(千八百七十八年、十二月)

スフィンクス

頂上の方は柔かく、下の方は固く擦り碎かれた、黄色を帯びた灰色の砂……何處を眺めても果てしの無い砂。

そして此の砂漠の上に、此の死んだ、砂埃の上に高く、イジプトのスフィンクスの巨大な頭が出て居る。

此等の厚い、突き出た唇、此等の變化のない、脹れた、獅子つ鼻、二つの弓門のやうな、高い眉毛の下に、半ば夢み、半ば醒めたる目。彼等は何を語るものであらう。

何事が彼等は云つて居る。彼等は實際話して居るのだ。けれ共

オデイバスの外は、その謎を解き、彼等の無言の話しを曉る事は出来ない。

待て、然し私は是等の容貌を知つて居る………それには毫し
もエジプト的の所がない。白い、生氣のない額、高く出た顴骨は
短かい、直線な鼻、美しい口に白い齒、柔かな口髭と捲れた願鬚、
そして廣く離れた、大きからぬ目………頭には、真中から分けた
頭髮を冠つて………然し其はヤロスラウの農夫、ソアザンの農夫、
カルプ、シドル、ヒミオンで、全然わが邦人、露西亞人だ！君も
またスフィンクスの中の人か？

君もまた、何事をか云はうとするのか？然らば君もまた一のス

フィンクスだ。

而して、君の光澤のない、沈んだ目は、また、何事か語つて居
る………そして、その話しは無言の謎語である。

されど、君のエデイポスは何處に？

あゝ、君がエデイポスとなるには、農夫の外衣を著ただけでは
十分でないのだ。おゝ、全露西亞のスフィンクス！

(千八百七十八年、十二月)

ニンフの女神

私は半圓を畫いた美しい山脈の前に立つた。若い、緑の林が頂上から裾野迄覆うて居る。

山の上、南方の空は澄み切つて青い。上には日の光線が亂れ輝き、下には、草に半ば隠れて、流れの早い小川がさゞめいて居る。

而して、古い物語、クリスト降誕の第一世紀に、ギリシヤの船がイージアン、シーを航海した時の話しが、私の心に浮ぶ。

時は日中で……それは静かな天候であつた。突然、水先案内の頭の上高くから、誰れか判然、呼ぶものがある。『汝、嶋の側を

航行する時『大御神バンは世を逝られた』と聲高に呼べ。』と。

水先案内は驚いた……怖れた。けれ共、船が嶋を過る時に、

彼れは命せられた通り、『大御神バンは世を逝られた。』と叫んだ。

すると、忽ち彼れの聲に應じて、全海岸に（その嶋には人は住んで居なかつたが）聲高い啜り泣、號泣の聲が長く曳いた、腸を千斷るやうな慟哭の聲が響いた。『死なれた！ 逝去くなられたかバンの大御神！』私は此の物語を想ひ出した……そして、『若し私が祈願を捧げたら、何んなになるであらう？』と、妙な考へが浮んだ。

けれ共、周圍の喜ばしい美しさを眺めては、私は死と云ふ事を考へる事は出来なかつた、それで有らん限りの聲を擧げて「大御神パンは甦られた！」と叫んだ。すると直に、不思議中の不思議、私の聲に應じて、凡て廣い、緑の山々から歡喜の笑聲が響き渡る。喜ばしい聲のつぶやきや柏手の聲が起る。「彼れは甦つた！パンは甦つた！」と、生々した若い聲が、囁々と叫ぶ。私の前にある凡ての物は、忽ちにして天の太陽よりも猶愉快さうに草の下にさぶめく小川より猶樂しさうに笑ひくづれた。私は軽い歩行で急ぐ梵音を聞いた、茂つた草むらの中には、大理石のやうに白い、著流した外衣の閃きと、生々した四肢の紅味が見える：

……其は山水の女神、森林の女神、酒の女神等が上天から此の地上に急ぎ降つたのだ。

直ちに、彼等は凡て森の空地に顯はれた。彼等の捲髪は、その神々しい頭のまはりに漂ふ、彼等の纖弱かな手には花圈と鏡鉞とを高く捧げて、キラ／＼と光らせて、オリンピアの笑ひを笑ひ乍ら、飛びつ、躍りつやつて来る……

彼等の前には一人の女神が歩いて居る。彼女は他の者よりも一層身丈が高く、一層美しかつた。肩には箭筒、手には弓を持って、そのふさ／＼とした捲髪には銀の新月形を著けて……

「爾は、光の神デイエーナか？」

けれ共、突然その女神は立止まつた……そして、凡て彼女に従いて居たニンフスは直に止まつた。心地よく響く笑聲は消え去つた。

私は黙つた女神の顔の、恐ろしく眞蒼になつたのを見た。私は彼女の足が地から一步も離れず、その唇は云ひ知らぬ恐怖に開き、その目は廣く睜つて、遠くを見詰めて居るのを見た……彼女は何を見たのであらう？

彼女の見詰めて居るのは何であらう？

私は彼女が見詰めて居る方に振向いた……そして、野の一條に低くなつた線の上、地平線上に、基督教寺院の白い鐘樓塔の上

の黄金の十字架が、一點の火のやうに閃いて居た……女神が見止めたのは、その十字架であつた。

私は、私の後ろに、断れかけた絃の響きのやうな、長い、弱々しい大息を聞いた、而して、今度振り回つた時にはニンフスの跡方もなかつた。

……廣い森は依然として青緑であつた、そして唯、其號此處に、枝々の厚く絡まつた間に、何か白いものゝ弱々しい閃きがあつた。ニンフスの白衣か、谷から立昇る霧であつたか、私は知らない。けれ共私は此等の女神達の消えて了つたのを何んなに悲しんだ

事か！ (千八百七十八年、十二月)

友と敵

終身禁錮と定められた囚人が、獄を破つて向ふ見ずに逃げた……彼れの後ろには、獄吏共が踵を踏む位に追迫る。彼れは懸命に走つた……追手共は漸く遅れ初めた。けれ共、見よ、彼れの前に河がある、岸は峻しい。幅は狭いが流れは深い……そして彼れは水泳を知らない！

薄い、腐れた板が、岸から岸へ渡してあつた。逃亡者は既にその上に足を乗せた。……けれ共、丁度その川の側に、彼れの一番の親友と、彼れの最も激しい敵が立つて居た。

彼れの敵は何も云はない、唯腕を組んだ。けれ共親友は聲を限りに叫んだ「危いッ！何をするんだ。氣狂ひ奴、氣を付けて見ろッ！板の全く腐つてるのは、お前には見えないのか。乗つたら最後、柵が折れて死ぬなあ決まつて居る。」

「だつて、外に渡る所も無いぢや無いか……そら、後から追かけて来るのが聞え無いのか？」と、望みなげに、憐れな人は唸つて、板を踏みかける。

「いけないッ！……死に、行くやうな事を、お前には何うしたつて、させないのだ。」と、熱心な友は叫んで、逃亡者の乗つてる板を引奪つた。逃亡者は直に泡立つ激流の中へ落ちた。そして溺

れ死んだ。

敵は満足らしく微笑んで、行つて了つた。朋友は岸に坐つて、彼れの慄れな………憐れな朋友のために、激しく泣き入つた。

けれ共、彼れの死に對して彼自らを責める心は、彼れには起らなかつた………少しの間も起らなかつた。

「彼れは俺の云ふ事を聞かなかつた！彼れは聽かなかつた。」と、落膽りして私語いた。

「だけ共、眞實に奴は恐ろしい牢獄の中で、何うしても一生暮さなくちやならなかつたんだ。兎も角、奴あ今苦しみを免れたんだ

死んだ方が善いのだ。斯うなるのも奴の因縁だらう。とは云ふものゝ、人情なもの、俺は悲しい、
そして親切な人は、下手に導かれた朋友の運命を思つて、遺瀨なさ相に、何時迄も啜泣くのであつた。

(千八百七十八年、十二月)

基督

私は夢の中に、低い屋根の木造の教會で親しく一青年、と云ふよりも寧ろ、一少年を見た。

古びた御畫像の前には幾本か細い蠟燭が點々と閃いて居た。

光の輪がそれらの小さい炎を巻いて居る。教會の中は薄暗く、

朦朧として居た………けれ共、私の前には澤山の人間が立つてゐ

て、彼等は時々揺れて、倒れかゝり、また起き上る。丁度、實の

充つた麥の穂に、夏の風が吹いて、悠かに波動を來たすやうに。

不意に、誰れか後から來て私の傍に立つた。

私はその方を向かなかつた。けれ共直ぐに此人は基督だと感じ

た。感動、好奇心、畏怖の情が急にむらがり起る。私は努力して………

………そして私の隣りの人を見た。

誰れもの顔と同じ顔だ、總ての人の顔と同じだ。眼は靜平に、

一心に、少し上の方を見て居て、口は閉ぢて居る。併し緊く閉ぢ

たのではなくて、上唇が云はゞ下唇の上に休憩んで居るのだ。

小さな頤髭が二つに分かれて居る。手は靜かに組んで居た。そし

て衣服は普通のを着て居る。

私は思つた「此れは何といふ基督だらう、斯んな平凡な、普通

な人！ 基督であらう筈はない。」
私は振向いて了つた。然し、此の平凡な人から目を離すか離さぬかに私は再び感じた、私の側に立つて居るのは、基督その人である。

再び私は強て振向いた……そして、またさきの普通の人のやうな顔、見た事のない容貌だが始終見るやうな顔。

忽ち私は気が沈んで、自分に歸つた。其の時初めて私は斯んな顔が、常人の顔のやうな顔が——基督の顔である事が曉つた。

(千八百七十八年、十二月)

(二)

(千八百七十九年——千八百八十二年)

石

海岸の古い、灰色の石を見たか？ 日暖かな春の満潮に生々した波浪が、四方から來てその上で破れる——破れて、そして躍る、そして其れを抱く——而してその海苔の生えた頭に、眞珠を散らしたやうな、キラ／＼と光る泡沫を浴せかける。

石は猶同じ石ではあるが、その鈍い表面は光輝のある色に花咲き出づる。

彼等は遠うの昔、鎔けた花崗岩が、やつと固結りかけた時の、そして凡て火の色に輝いてゐた時の面影を示してゐる。
それは適切、私の老いた此頃の情に當つてゐる。若々しい、少女の心の浪に取まかれ、侵されて……………彼等の愛撫の下に、長く褪せた色、燃えた火の跡ある私の心には血色が潮した。
波は干き退つた……………けれ共、激しい風は彼等を乾かせてゐるが、色は猶鈍くはならない。(千八百七十九年、五月)

二羽の鳩

私は傾斜した丘坂の頂上に立つた。私の前には實の充つた黒麥が、金銀雑色の海のやうに展開してゐる。

けれ共、その海には小さな波も走らず、息の詰まるやうな空氣には毫しの風もない。一大暴風雨が來かけてゐるのだ。

私の近邊は太陽が未だ物凄いい火に輝いて居るが、左程遠くもない黒麥の向ふには、暗緑の風雲が、地平線の半ばを全く覆うて、怖ろしい巨塊と横はつて居る。

總てが沈黙した……………總ての物が、將に滅びんとする日の光り

の、毒々しい睨視を受けて沮喪てゐる。何の音もない、鳥の影も見えない。雀さへも姿を隠した。唯何處か近くで大きな午莠の葉が、執拗く、ヒラ／＼と囁いて居る。

籬の、が、よ、も、ぎ、は、強、く、臭、ふ！ 私は暗緑の巨塊を見詰めてゐた……私の情には朦朧とした不安があつた。「来るなら早く来い、早く！ 閃け、黄金の蛇よ！ 響け、神鳴よ！ 怖ろしい風雲よ、早く動いて洪水となれ、そして、疑惑の此の苦痛を早く取去つてくれ。」それが私の思ひであつた。

けれ共風雲は動かなかつた。それは依然として沈黙した世界を息の詰まるやうに、覆うてゐる……そして唯益々擴がつて、暗

くなるやうに見えるばかり。

そして、見よ、その荒涼たる暗緑の中を白いハンカチーフのやうな、また一と握りの雪のやうな或物が、滑らかに平らに飛んでゐる。それは村の方から飛んで来る白い鳩であつた。

其は飛んだ、真直に飛んだ……そして森の中に飛込んだ。暫らく過つた——猶同じ物凄い静黙……けれ共見よ！ 二つのハンカチーフは空中に閃いた。二つの雪の小塊は漂ひ歸つて行く。二羽の白鳩は平らかに、彼等の家路を翔つて行く。

そして、竟に今暴風雨が起つて、混乱が始まつた。

私は辛うじて家に歸つた。風は咆哮つて、彼方此方と狂ひ廻る。

その前まへを疾走しつさうする、低い、赤い雲あかが、断片こまに引裂ひきさかれるやうに見える。總すべての物はゴツチャに渦卷うづまいてゐる。打付ぶつけるやうな雨あめが、瀑たきのやうに、直立つきたつた幹みきに降り注そぐ。突然とつぜん響ひびく雷かみなりの音おとは砲彈はうだんのやうに轟とろく。空氣くうきは硫黃いわうの香かほりに充みちてゐる。

けれ共視どもきかゝつた屋根やねの下したには、二羽はの白鳩しらほとが、屋根窓やねまどの台だいに相并あひならんで止とまつて居かる。一羽はは彼れかの連れつの後あとから飛とんだ者もので、彼れかは多分たぶん、その連れつを死しから救すくつて、連れ歸かへつたのだ。

彼等かれらはその羽毛うまうを逆立さかたて、互たがひにその翼つばさを觸ふれ合あはせて坐すわつてゐた。

彼等かれらは幸福かうふくだ！そして彼等かれらを見みてゐる私わたしも幸福かうふくだ……私わたしは孤ひと

獨ひとりであるけれども……いつも孤獨ひとりであるけれども。

(千八百七十九年、五月)

明日！明日！

日々を送つて行くのに、殆んど何れの日も實に空虚な、氣倦い、徒らなものである！ 其の後は殆んど何等の痕跡をも残さない！ 一日く〜と過ぎて行く時に、此等の時間は實に無意味な、實に馬鹿く〜しい物ではある！

けれ共尙生存すると云ふ事は人の希望なのだ。彼れは人生を讚嘆する、彼れは人生の上に、彼れ自らの上に、また將來の上に希望を置く……おゝ、何んな祝福を彼れは將來から待設けるのであらう！

けれども、何故彼れは、來るべき他の日を以て、彼れが丁度送つた今日のやうなものではあるまい、と想像ふのであらうか。

否彼れはそれを想像つて見る事すらもしない、彼れは全く考へない事を好む、而して彼れはよく通つて行く。

「あゝ、明日、明日！」と、彼れは「明日」が彼れを墳墓に投げ入れる迄、自らを慰める。

さて、而して一度墳墓に入れば、汝は最早選擇をしない、汝は最早考へない。(千八百七十九年、五月)

自然

私は夢を見た。迫持屋根の巨大な、地下の寺院に來た。地下の平等燈のやうなものが一面に點つてゐた。

寺院の真中には緑色のフワ／＼した衣服を着た、威嚴のある一人の女性が坐つてゐる。頭を手で支柱で、彼女は深い思ひに耽つてゐるやうに見えた。

直に私は、此女性を「自然」そのものであると知つた。而して、身の毛彌立つ畏敬の感情が、即時に私の心の奥底から震ひを來たした。

私は座つてゐる人に近づいて、丁寧に敬禮した。「おゝ、われ等凡てに平等の母よ！何をあなたは御考へになつて居られますかあなたの御考へになつて居るのは人間の將來の運命でありますか、或はまた、何うしたならば人は、あり得べき最上の、完全と幸福とに達する事が出来るかと云ふ事でありませうか？」と、私は訊いた。

女性は徐ろに、その黒い、威壓するやうな眼を私に向けた。彼女の唇は動いて、私は鐵を鳴らしたやうに響く聲を聞いた。

「妾は、蚤が、その敵から今少し容易く逃げられるやうに、その脚の筋肉に更に強い力を與へる方法を考へて居る。攻撃と、防禦

の均衡が破れてゐる……それは回復せられねばならぬ。」

「それ、それがあなたの御考へになつて居る事なのですか。けれども、吾々人類はあなたの寵兒ではありませんか。」と、私は吃つて對へた。

女性は微かに顔を蹙めて「あらゆる生物は皆妾の子供です。妾は等しく彼等の厄介を見てゐる。そして皆同様に私は滅亡させる。」と、彼女は云つた。

「けれ共、權利……理由……正義……」と、私は再び吃つて云つた。

「そんな事は人間の言葉です。」と、私は鐵のやうな聲が云ふのを

聞いた。「妾は善も、悪も知らない。……理由と云ふ事は妾を束縛しない——そして正義とは何か。——妾はあなたに生命を賦與へた。そして妾がそれを奪つて他のものに與へるのである。女でも男でも……妾は構はない……あなた自らの氣を付けなさいそして妾の邪魔になつてはなりません。」

私は云ひ返さうと思つた……けれ共、大地は沈鬱な呻きを發して、震動した。そして私は醒めた。(千八百七十九年、八月)

絞殺しろ！

「千八百三年の事だつた」と、年寄つた私の知人が初めた「オウス
テルリツツ役の遠からぬ前、自分が一士官として勤めて居た聯隊
は、モラビアに屯營して居た。

「自分等は土地の住民を惱まし、煩はさぬよう厳しく命令されて
居た。實際彼等は、自分等が同盟國民であると思はれて居るにも
係らず、自分等を疑はしい者と見て居た。

「自分は従僕を伴れて居た、已前には自分の母の農奴であつて、
イエゴルと云ふ名だつた。彼は静かな、正直な者で、自分は子供の

時から彼を識つて居た、そして朋友として彼を扱つて居た。

「さて、ある日の事、自分の住んで居た家で、罵る聲、叫ぶ聲、
泣く聲が聞こえる。家の婦が牝鶏を二羽盗まれた、そしてその罪
を自分の従僕の仕業に歸したのだ。彼は辨解して、自分を證人に
呼んだ。……」恐らく彼れが盗んだのでせう、彼れ、イエゴル
ア
ウタモノウが！」。自分は婦にイエゴルの正直である事を斷言した
が、婦は自分の云ふ事を聞き容れない。

「其時急に町を通る馬の蹄の音が聞こえた。司令長官が彼の參
謀官と共に騎つて來たのだ、彼は並足の歩調で騎つて居た。頑丈
な肥え太つた人で、頭を垂れて、胸には勳章をかけて居た。

「婦は彼れを見た、そして彼の馬の前に走り出てドツカと跪いた。帽子も冠らず、凡て取亂した婦は、自分の方を指して聲高に私の従僕に就て愁訴し初めた。」

「御大將さま。」と婦は叫んだ『閣下！御調べください！助けて下さい！救つて下さい！此の兵隊が私のものを盗みました！』

「イエゴルは帽子を手に持つて、胸を少し彎げる位にして、番兵のやうに双方の踵をくつつけて、家の戸口に真直に立つて居た、そして何も云はない。彼は大將の一行が町の真中に立止まつたので全く當惑して了つたのか、それとも降りかゝつて來た災難で氣を失つて了つたものか、それは自分には云へないが然し其處には憐

れなるイエゴルは白墨のやうに眞白になつて、目をしばたゝきながら立つて居た。

「司令長官は意味の解らぬ、不機嫌さうな一瞥を彼に與れて、怒つたやうな口調で『さうか？』と云つた……イエゴルは笑つて居るやうに齒を露はして彫像の如くに立つて居た。側から見居たら君も奴は笑つて居ると云つたやう。」

「其時司令長官は突然に『絞殺しろ！』と云つて、彼の馬を驅つて歩み出した。初めは並足の歩調で、次には速足で。凡ての參謀官は彼れの後に急いだ。唯一人の副官が鞍の上から振り向いて、イエゴルを過ぎ行き様に眺めた。」

「服しないわけには行かない…… イエゴルは直に捕へられて處刑の場に送られた。」

「彼は全く落膽して了つて、幾度もく『嗚呼！嗚呼！』と喘いで居るばかり。そして『神様は御存知だ、私ではないのだ！』と、囁いてゐた。」

「自分に別れを告げ乍ら痛ましく彼は泣いた。自分は絶望して了つた。『イエゴル！イエゴル！大將の前で何も云はないと云ふのは何うした事だ？』と、自分は叫んだ。」

「神様は知つて居らつしやる、其れは私ではない！」憐れな者は泣きしやくり乍ら繰り返す。婦自身も恐ろしくなつた。彼女はこ

んな恐ろしい終局を決して期待して居たのではなかつた。そして、彼女は自分自身にその責任を負うて、哭き乍ら出かけた。彼女は牝雞が見出され、それに就て總ての事が明らかになつた事を誓つて、總ての人一人々に就いて熱心に慈悲を乞うた……

「無論萬事何の役にもたつ事では無かつた。」

「何分戦時だからね君！懲罰！婦は高く、益々高く泣く。」

「イエゴルは僧侶に恕罪を受けてから自分に向いて、

「貴殿、彼女に心を痛めないように云つて下さい…… 私は彼女を恕しました。」

私の知人は彼れの従僕の此の最後の言葉を語つた時に「憐むべ

きイエゴルよ。親愛なるものよ。眞實の聖者よ！』と小聲で云つた。
そして、涙が彼れの年取つた頬に流れた。

(千八百七十九年、八月)

何を思ふだらう

私が死の間際になつて、もし少しでも何事かを考へる状態に在つたとすれば、私はその時何んな事を思ふであらう。

私は、わが生涯を利用する事の至つて少なかつた事、生涯熟睡し、假眠り通した事、その賜物を享け楽しむ方法を殆んど知らなかつた事等を思ふであらうか。

「何？此れが死？そんなに早く？不可能だ！私はまだ何事をもする閑暇がなかつた……私は唯初める用意をして居たのだ！」

私は過去を回想するだらうか。そして經來つた僅かの輝いた瞬

間に——氣高い肖像と顔容とに思ひを止めるであらうか。

私の悪業が私の心に想ひ起せて來るであらうか、そして私は、

甲斐なき後悔の燃える煩悶に心を刺されるであらうか。

私は墳墓の彼方で私を待つて居るものについて考へるであらうか……そして、實際何物か其處で私を待つてゐるのだ。

否……私は想像ふ。私は考へまいとするであらう。そして、

私の前に黒く横はる、怖ろしい暗黒から私の心を奪ふ爲に、私自身に何かつまらぬ事に、興味を持つやうに強うるであらうと思ふ

私は嘗て、死にかけて居る人を見た。その人は皆なが榛子を彼に嚙ませぬやうにしたと云つて、不平をこぼしてゐた……

そして唯彼れの深く眠んだ眼の底に、致命傷を負はされた鳥の、裂かれた羽翼のやうに、何物か震へて、そして力争いてゐた。

(千八百七十九年、八月)

その薔薇よいかに美しく
清かりしよ

或る所で、或る時、永い々々に私は詩を讀んだ。それは直ぐに忘れて了つた……が最初の行は私の記憶に密着して居る——

「その薔薇よ、いかに美しく、いかに清かりしよ……」

今冬である。霜は窓硝子に凍りついて、暗い室の中には蠟燭が寂しく燃えて居る。室の隅で私は急いで起き直る。すると私の頭にはその行が木魂のやうに響く——

「その薔薇よ、いかに美しく、いかに清かりしよ……」

そして私は露西亞の田舎家の低い窓の前に來て居る。夏の黄昏が段々と溶けて夜になる、暖かな空氣は木犀草や菩提樹の花の芳香を漂はせて居る。窓には彼女の腕に凭りかゝつて、其の頭を彼女の肩の上に垂れて一人の小女が坐つて居る。そして新しい星の出で來るのを待ち受けて居るものゝやうに黙つて、熱心に空を見詰めて居る。その夢見るやうな眼には何等の無私！何等の神興！その開いた不思議な唇に表はれた何等の無邪氣！その静かな、悶えのない胸を柔らかに膨らす。何といふ靜穩な呼吸！

若い顔の側面には何と云ふ純潔、可憐！私は彼女に物言ふ事は出来なかつた。けれ共、彼女は何んなに私に親愛であつたらう、私の心臓は何んなに鼓動したらう！

その薔薇よ！いかに美しく、いかに清かりしよ！

けれ共室の中は段々と暗くなる………蠟燭は低い天井に戦く陰影を躍らしつゝ薄暗く燃えて、溶けた蠟が轉がり落ちる。家の外には辛々しい霜の碎ける音が聞こえ、家の裡には老年の淋しい囁
A.....

「その薔薇よ、いかに美しく、いかに清かりしよ！」

私の前には他の幻影が起る。田舎に於ける家庭生活の楽しい騒ぎ聲が聞こえる。二つの亞麻色の頭が互にひしと凭れかゝつて、その輝いた目で不寐に私を眺めて居る。薔薇色の頬は笑ひを抑へたので振り、其手は熱情を以て握りしめて居る。若い聲が他を壓倒して鳴り響く。少し向うの方の整頓した暖か相な室の端には、矢張若い他の手が、不慣な指で古いピアノの鍵の上を飛ぶ。そしてランナーの舞樂も家長としての銅壺の滾る音を壓倒し得ない。

「その薔薇よ、いかに美しく、いかに清かりしよ！」

蠟燭は急に明るくなつて、そして消えた………そのしはかれた、

艶のない咳嗽は誰れのだらう？ 圓くなつて寝て居た私の年寄つた
 犬が足元で身震ひする。私の唯一の伴侶……私は寒い……私
 は凍えた……そして彼等の總ては死んで居る……死んで……
 ……
 (千八百七十九年、八月)

海上にて

私は小さな汽船でハンブルグからロンドン指して行くのだ。吾
 等は二人の旅客である。私と一疋の小さな牝猿、この猿はハンブ
 ルグの商人が、彼れの英國の仲間に贈物として遣はすのだ。
 彼女は甲板の或る席に軽い鎖で縛し付けられてゐる。そして少
 しも休みなしに動き廻つて、鳥のやうに小さな、悲しさうな聲を
 出して啼いて居る。
 私が彼女の側を通ると、いつも彼女は小さな、黒い、冷たい手
 を差し延べて、その小さな、悲しさうな、殆んど人間の目と思は

れるやうな眼から私を覗く。私が彼女の手を執ると彼女は啼き止んで、休みなしに動き廻る。

死んだやうに静かだ。海は鉛色の、動かぬ敷布のやうに、四方に敷かれて、そして狭く小さく見える。濃い霧がその上に覆ひかゝつて、帆柱の頂上を雲の中に隠し、そして其の柔かな、朦朧したもので眼を眩まし、疲れしめる。太陽が此のぼうとした中に、曇つた鈍い赤色をして懸つて居るが、夕方前には、それは異常な、不思議な、物凄い光りに輝いて居た。丁度何か重い絹の織物のやうな長い真直な褶が、船首から海の上を順々に過ぎ、過ぎるに従つてそれが廣げられる。そして皺みつゝ、濶くなりつゝ、一揺

れしては再び滑かになつて消えて行く。單調な音を立て、回る旋轉器に攪亂されて、牛乳のやうな白い泡沫が飛ぶ。そして幽かな響きをなして、碎けて蛇のやうな逆流を造り、再び溶け會つては又霧に吞まれて消えて行く。

居る
艦では猿の啼聲のやうな、小さな鈴が執拗く、悲し相に響いて

時々海豚が泳ぎ越える、そして急に身を轉じて、殆んど波立たぬ水面の下に匿れる。

船長は幽鬱な、日に焼けた顔の、黙つてゐる男で、短かいパイプで烟草を吹かし、腹立ち氣にドンヨリと濼んだ海に唾する。

私が何を問うても彼れは、断々の吐きで答へる。私は私の唯一の伴侶、猿の所へ行かざるを得ない。

私は彼女の側に坐つた。彼女は啼止んで、再びその手を差し出した。

濃密な霧は、睡氣を催すやうな濕氣を含んで、吾等を壓へ付け、そして同じ無意識の夢境に葬る。われ等は兄と妹とのやうに相並んで坐つた。

私は今微笑んで居る……然しその時私は他の感情を持つて居た。

われ等は總て一人の母の子供である。そして私は此の憐れな小

さい動物が、私を迄兄弟のやうに信頼して、慰められ、愛撫されて居たのを喜ぶ。(千八百七十九年、十一月)

N
N

静穩に、優雅に爾は人生の行路を歩む。涙もなく又微笑もなく。
而して静平なる態度の無關心な一瞥の時も、爾の穩かな心は殆んど動いて居ない。

爾は善良にして賢明なるものである。……而して爾は凡ての物から遙かに隔たり、爾は何人をも要しない。

爾は美しい。而も爾が自らの美しさを貴しと見て居るのか、居ないのか、誰にも解らない。爾は一の同情も與へたる事なく、何人にも爾は期待しない。

N
N

爾の一瞥は奥深い、而して其裡には何等の思想もない。澄み切つた深さの中は真空である。

かくて涅槃の野にはグルツクの樂の嚴かな詩歌に應じて、優雅なる影が、憂愁も喜悅もなくして動く。

(千八百七十九年、十一月)

中に爾の永遠の光りを注げ！

(千八百七十九年、十一月)

僧

私は一人の僧、隠者、聖人と知己であつた。彼れは唯祈禱の樂しさの爲に生きてゐた。彼れは祈禱に耽つて、常に寺院の冷たい床の上に膝の下の彼れの脛が、麻痺れて木の端のやうに無感覺となる迄永く起つて居た。彼れは足を感じなかつた。彼れは尙立ち續けて祈禱した。

私は彼を了解した、そして恐らく彼を羨んだ。けれども彼れをして私をあまりに了解せしめ、そして私を責めしむるな。私には彼の喜びは近づき難きものである。

彼は彼自身を、彼の悪むべき「我」を絶無する域に達して居る。
 然し乍ら私は又、主我主義からではないが、祈禱しない。
 私の「我」は、恐らく彼の「我」が彼にあるよりも更に私に取
 つて重苦しく憎むべきものであらう。
 彼は彼自身を忘れ得る場所を見出した………けれ共私も亦、そ
 んなには續いて居ないが、同じ物を見出した。
 彼は嘘を云はない………併し私も亦詐らない。

(千八百七十九年、十一月)

われらは尙ほ戦はう

時としては、無意味な、つまらない事が全く人間を變へて了ふ
 ものだ。

幽鬱な思ひにくれて、或日私は大道を歩んだ。私の情は暗い憂
 愁の重みに壓へられ、沈鬱に壓倒されてゐた。私は頭を上げた：
 ……私の前には二列になつた白楊の間に道が矢のやうに遠くに馳
 せて居る。

そこを越えて、私から十歩向ふのその道を越えて、眩い、夏の
 日が金のやうに閃く裡に、一群の雀が、陸續と躍んでゐる。氣兼

なく、嬉しさに、心強さうに躍んでゐる！殊にその中の一羽は
必死の勢で路傍を跳ねて、その小さな胸をつき出して、丁度彼
れは何物にも畏れないと云つてゐるやうに、無遠慮に囀つてゐる。
實に勇ましい小戦士だ！

そして其時、頭の上高く空中には一羽の鷹が舞つてゐる。恐ら
くその小戦士を貪食するのであらう。

私は是れを見て微笑んだ、體を振つた、そして悲しい思ひはす
ぐに消え去つた。勇氣、敢爲、人生の愛、是れ等のものを新らし
く感じた。

わが上にもまた飛べ、わが鷹よ……

われらは戦はう、そして凡てそれを畏れまい。

(千八百七十九年、十一月)

祈 禱

何んな事でも人間の祈は皆奇蹟を祈るのだ。あらゆる祈禱は是れに歸する。「偉いなる神よ、二二が四たらざることを許し給へ。」と。

唯斯んな祈だけが、人格から人格に對する眞の祈禱である。宇宙の大靈に祈り、最高實在に祈り、カントの、ヘゲルの、純精無形の神に祈ると云ふやうな事はあり得べからざる事であり、また考ふべからざる事である。

けれ共、人格のある、活きた、形體のある神だと云つて、二と

二とを乗じて四でなからしむる事が出来やうか。

凡ての信者は「出来る」と答へなければならぬ、また彼自身にもそれを信じなければならぬ。

「けれど若し、理性が彼れをして、此の不條理に反抗せしめたならば？」

その時沙翁が彼れを助けに来る、「ホレーシオよ、天地の間には外に種々の事がある。」云々。

そして、若し人々が眞理の名を以つて尙ほ彼れを駁せんとしたならば、唯かの有名な問を繰返すの外はない。「眞理とは何ぞや。」と。

然ればわれ等は盃をあげて樂まう、そしてわれ等の祈禱を捧げようではないか。(千八百八十一年、七月)

露西亞語

わが國の運命に疑惑を懷き、物淋しく考へ込む日に當つて汝のみ唯一のわが支柱であり、土台である。力ある、正確なる自由なる露語よ！けれ共、邦で爲されて居る總ての事を見るに付け、何うして汝の爲に失望せずに居られよう？ けれ共誰か、斯の如き國語が偉大なる人民の賜物でないと考へ得るものが有らう？

(千八百八十二年、六月)

散文詩了

明治四十三年三月十五日印刷
明治四十三年三月十八日發行

(定價金參拾五錢)

不許複製



譯者

草野柴二

發行者

佐藤義亮

印刷者

島連太郎

印刷所

三秀舍

東京市麴町區飯田町三丁目廿五番地

東京市神田區美土代町三丁目一番地

東京市神田區美土代町三丁目一番地

發行所

電話(番町)二、三三三
振替(東京)九、六三九

新潮社

東京市麴町區飯田町三丁目二十五番地

世界的に偉大なる藝術品！

ツルゲーネフの最傑作出でんこす

小説 **貴族の家**

相馬御風氏譯

近刊五月下旬發賣

ツルゲーネフの作中、最も賞讃せられ、最も廣く讀まれたるは『貴族の家』也。死に行く古き人々、新舊兩時代の衝突に於ける犠牲者の悲しき運命と、草々の萌え出づるが如き新らしき時代との纏れをば、哀切悲痛なる戀物語を親糸として織り出したる傑作にして、女主人リザー及び男主人公ラブレツスキーの哀切なる運命は、若き男女をして手を執つて泣くの感あらしめん。譯者並に出版者は、此偉大なる藝術品を、熱情を以て我國現代の青年男女諸君に捧げんと欲す。

▲散文詩は奈何にして作る可き乎

散文詩は『小品文』の名の下に盛に研究試作せられつゝあり

小品文範

松原至文氏著

再版出來 定價參拾錢 郵送料四錢

▲散文詩の模範▼

本書は、花袋、風葉、藤村、獨歩、青果、葉舟、漱石、虛子、有明、荷風、孤雁、烏水、泣菫等文壇の名流三十家が最も得意とせらるゝ散文詩的小品文を網羅し、龍頭には選者が簡潔にして明快なる評語を掲げて、其文の特色長所等を明かならしむ。

▲散文詩の作法▼

本書は、葉舟、有明、青果、荷風、御風、秋江、空穂、孤雁の八氏の精細にして懇切なる散文詩的小品文作法を掲げたれば、讀者は以て新文藝の精粹たる小品文の眞意義に通じ、その創作の秘奥を明にすることを得べき也。

▲是れ我文壇に於て試みられたる最初の散文詩也

水野葉
舟氏著

響

袖珍式最新
價參拾五錢
郵送料四錢

小品文集
七版
賣切八版
印刷出來

▲『早稲田文學』曰く、散文詩的小品文を以て、現今文壇の第一人を以て目すべき水野葉舟氏が最近の作を集めたもので、近來最も氣持ちよく感じた書である。
▲『中學世界』曰く、水野氏の作品は、概して感覺的で、印象が鮮かである、だから新しい、鋭い、併し其れと共に柔らかな感情が生々として出てゐて、直に感興に觸れさせる。
▲『趣味』曰く、調子がいかにも舒びくとして柔かな書き方である、全體が叙情的で、しんみりと胸に響き來る所が好い。好個の散文詩とも云へやう。
▲『新天地』曰く、すなほな、嫌味のない文體が奈何にも懐かしく出てゐて、心持ちがよい。
▲蘆花氏の『自然と人生』に對比しても毫も遜色がないと思ふ。
▲『女子文壇』曰く、今の作家の中で感じと云ふことを能く表はす人は水野君など其主なものでせう。『響』は散文の好きな人にも、詩の好きな人にも、屹度ポケット(婦人なら懐)から離すことの出来ない小冊子でせう。

▲是れ『響』と共に歓迎せられたる清新の文集也

眞山青
果氏著

夢

袖珍式最新
價參拾五錢
郵送料四錢

小品文集
三版
賣切四版
印刷出來

▲報知新聞曰く、青果氏は詩人として大なる天分あるに非ずやと思はれしが、今此小品集を見るに果して詩才潑瀾、情韻の極めて饒かなるものあり。好箇の散文詩を以て目すべき佳篇少なからず。小品と云ふも自ら一種の型を作り都べてを之に當てはめんとするが如きものにあらず。各種の様式の下に多様の面目を示せるが故に、讀者を飽かしむるの單調なく、興趣掬するに餘りあるを覺ゆ。

▲時事新報曰く、體裁は水野氏の『響』と同型なり。短いものだけ、疵もなく、氏が小説以上に面白く讀まれたるものも尠なからざる中に、「小春日和」「霜の朝」「温泉の夜」(以下略す)等、何れも再讀の値あり。

簡潔にして趣味多き著者獨特の句註を添ふ

芭蕉 蕪村 子規 三聖俳句選

再 佐藤紅綠氏選

(版) 袖珍頗美本 ▲價參拾五錢
三百二十頁 ▲郵送料四錢

何人も看よ!

單に俳句研究者のみならず何人にも趣味涵養の上にはた作文作歌の上に大なる裨益を得べき也

▲俳句を作らんとせば先づ大家の作を諷誦せよ、日夕諷誦し來らば其格調風骨自ら我作中に入りて、名句を得るに至る可し▲俳壇の名流紅綠子こゝに見る所あり、年少初學の士の爲めに模範とすべき句集の必要を感じられ、俳界の三聖たる芭蕉、蕪村、子規三家の佳句無量三千を輯め之を一巻となせり▲選擇の嚴密にして適切なる、尋常世間の句集と遙に異なる所あるは勿論、更に紅綠子獨特の句註あり▲句註は單に字義、故實の解釋に止まらず、一句の精神、句作法の活機を示して以て初學者の指導を主となせり▲本書は實に俳界未曾有の寶卷也。

▲本書によりて作歌自在の秘訣を看よ!

和歌新辭典

金子薰園氏著

▲總洋布函入 ▲定價六拾錢
▲最上製美本 ▲郵送料六錢

大特色

▲幾萬の歌語を網羅して之に精細なる註解を施し
▲歌語を列ねて一首となすべき方法を詳細に説き
▲模範とすべき名家の作例を擧げて一々評釋せり

▲斯道無二の典範▼

(報知新聞評)其閱歴と地位とに於て新時代和歌の指導者たるに最も適する金子氏が一歳有餘の苦心に成れる者なり。歌語を網羅して之に精細なる註解を加へ、歌語を列ねて一首となすべき方法を説き、更に作例を擧げて評釋を施すなど、用意飽く迄親切、斯道無二の典範と云ふ可し。

▲忠實なる辭書也▼

(毎日新聞評)從來此種のものはないではな

いが多くは杜選極るもので本書の如く忠實ではない。編纂にも新生面を開いて、一寸した註解でも中々面白く詩趣に満ちて居る初學者の手を取るやうに極平易に分り易く説明して丁寧過ぎる位だ。要するに忠實な辭書である。

▲短歌入門者の指針▼

(日本新聞評)編纂いかにも懇切に一に短歌入門者の指針たるを期せる用意は一瞥して知ることを得べし初學者一部を座右に置かば、縦横三十一字を列ぬるを得ん。

編壹第書叢文作

金子薰園氏著 (手紙文範として空前の良書也)

新書簡文

版六

全一冊洋裝美本
定價金參拾錢
郵送料金六錢

書簡文の熟達は成功の武器である。僅に手紙一本で、學校を出た許りの青年が重要な地位に上つたと云ふやうな實例は決して珍しくない。奈何なる職業の人でも奈何なる身分の人でも、必ず之が熟達を計らねばならぬ。本書は曩に女子書簡文を公にして多大の稱賛を博した薰園子が、日本文章學院講師として多くの後進子弟を指導せる實地の經驗により著はされたもので、日々起り來る諸般の贈答に應用して少しの遺憾がないやうに、子が苦心の餘に成れる活ける文例を掲げてある。穩健、雅馴、平明、簡潔等、凡そ書簡文に尊ぶ有らゆる特長は、此書によりて始めて見る事が出來よう。

編參第書叢文作

文學士 小林愛雄氏著

日記新文範

刊新

全一冊洋裝美本
定價金參拾錢
郵送料金六錢

日々起り來る種々の出來事を録し其感想を描く。文材滾々として送迎に違あらず。日記は修文の絶好機關也。而も日記の文は、簡潔明到、一語直に要點を提へて心核に徹することを要す。之に熟せんとせば、須らく名家の作例を範として誦讀す可し。小林文學士は『帝國文學』の編輯主幹として文壇に重きをなすの人、茲に現代諸名家の日記中、嚴正なる鑑識の下に數十篇を抜きて本書を編す。學者の日記あり。文士の日記あり。實業家の日記あり。學生の日記あり。種類各方面に涉りて、何人も直に範として學ぶに値するものゝみを録す。添ふるに、日記執筆上の懇切なる注意を以てす。

再版賣切三版發賣——紙數三百二十頁、定價金五拾錢、郵稅六錢

文學入門

文學士 夏日漱石氏序
文學士 生田長江氏著

諸君のうち、文學者となりて、自由奔放なる文藝の
別天地に遊ばんとする人あらば、速に本書を見よ。

- ▲生田長江氏は帝國大學出として近時嘖々の名ある秀才也（朝日新聞評）
- ▲文學初學者の心得べき事を網羅して親切なる解釋を與ふ（報知新聞評）
- ▲文章輕快流暢にして聊かの澁滯なく平易にして解し易し（時事新報評）
- ▲近時發刊の書中價值大なる者として廣く推薦するに足る（毎日新聞評）
- ▲著者は確かに本書を作るべき素質と修養とを持つて居る（帝國文學評）
- ▲本書の如く忠實にして眞面目なる書を得たるは喜ぶ可し（中學世界評）

